

第 27 回 海外研究調査団 報告書

— 中欧の歴史的風土の保全と活用に関する調査 —



【調査期間】平成 19 年 10 月 20 日(土)～10 月 28 日(日)9日間

【訪問地】 チェコ(チェスキー・クロムロフ) ～ オーストリア(ハルシュタット)

～ ハンガリー(トカイのワイン地帯)

財団法人 都市緑化技術開発機構

はじめに

財団法人都市緑化技術開発機構は、海外における都市緑化技術の調査・研究を目的として、海外研究調査を毎年実施している。平成19年度は、「中欧の歴史的風土の保全と活用」をテーマに、平成19年10月20日（土）から28日（日）の9日間の日程で第27回海外研究調査団を派遣した。

訪れたのはチェコ共和国、オーストリア共和国、ハンガリー共和国の3カ国で、チェコ共和国では、全市が世界遺産登録されているプラハ市とチェスキー・クロムロフ市の歴史的街並みの保全実態について視察し、オーストリア共和国では文化的景観の先進事例であるハルシュタット・ダッハシュタイン・ザルツカンマーグットを廻り、ハルシュタットを公式訪問するとともにヴァッハウ渓谷の概要を調査した。また、ハンガリー共和国ではブタペスト市の観光都市づくりを視察し、トカイワインにまつわる文化的景観が世界遺産に登録されているトカイ村を公式訪問した。

各公式訪問先では、代表者から取り組み内容について詳細な説明を受けるとともに、ご同行いただいて現地調査を行った。また、公式訪問の合間にも精力的に歴史的風土の保全活用の取り組みを視察した。

調査団には、全国から21名の方が参加され、（財）国際花と緑の博覧会記念協会 常務理事の亀山始様に団長をお願いした。

本調査報告書は、団員が分担して執筆し事務局で編集したものである。事前に情報を集め調査事項を整理した上で現地を訪れ、責任者に直接質問して調査を行っており、国内では入手できない貴重な情報を得ることができたものと考えている。また、調査団員各位の様々な視点で取りまとめられており、執筆者以外の参加者にとっても新たな発見があるものと思われる。

本報告書が、調査参加者及び参加機関において活用されるとともに、わが国における歴史的風土の保全活用に係る今後の取り組みの参考になれば幸いである。

平成19年12月
財団法人 都市緑化技術開発機構

目 次

はじめに

I. 調査の概要

調査の目的
調査行程
公式訪問先
調査団参加者名簿

II. 調査報告

統括報告
世界遺産 ブラハ歴史地区
世界遺産 チェスキー・クロムロフ歴史地区
世界遺産 ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの文化的景観
世界遺産 ヴァッハウ渓谷の文化的景観
世界遺産 ブダペストのドナウ河岸とブダ城、アンドラーシ通り
世界遺産 トカイのワイン地帯の歴史的・文化的景観

III. 資料リスト

むすび

I . 調査の概要

1. 調査の目的

「美しい日本の歴史的風土 100 選」や世界文化遺産の「文化的景観」に多くの自治体に関心を示している。このことから、わが国の歴史的風土や文化的景観の持続可能な保全と活用のあり方を探ることを目的に、地域固有の歴史的風土や文化的景観が高い評価を受けている中欧の地域づくりについて、世界遺産登録されているチェコ共和国、オーストリア共和国、ハンガリー共和国の代表的事例を視察し、歴史的風土、文化的景観、まちなみの保全と活用について、その政策や取り組みについて調査した。

2. 調査行程

(1) 行程

■ 調査期間 2007 年 10 月 20 日（土）～28 日（日） 9 日間

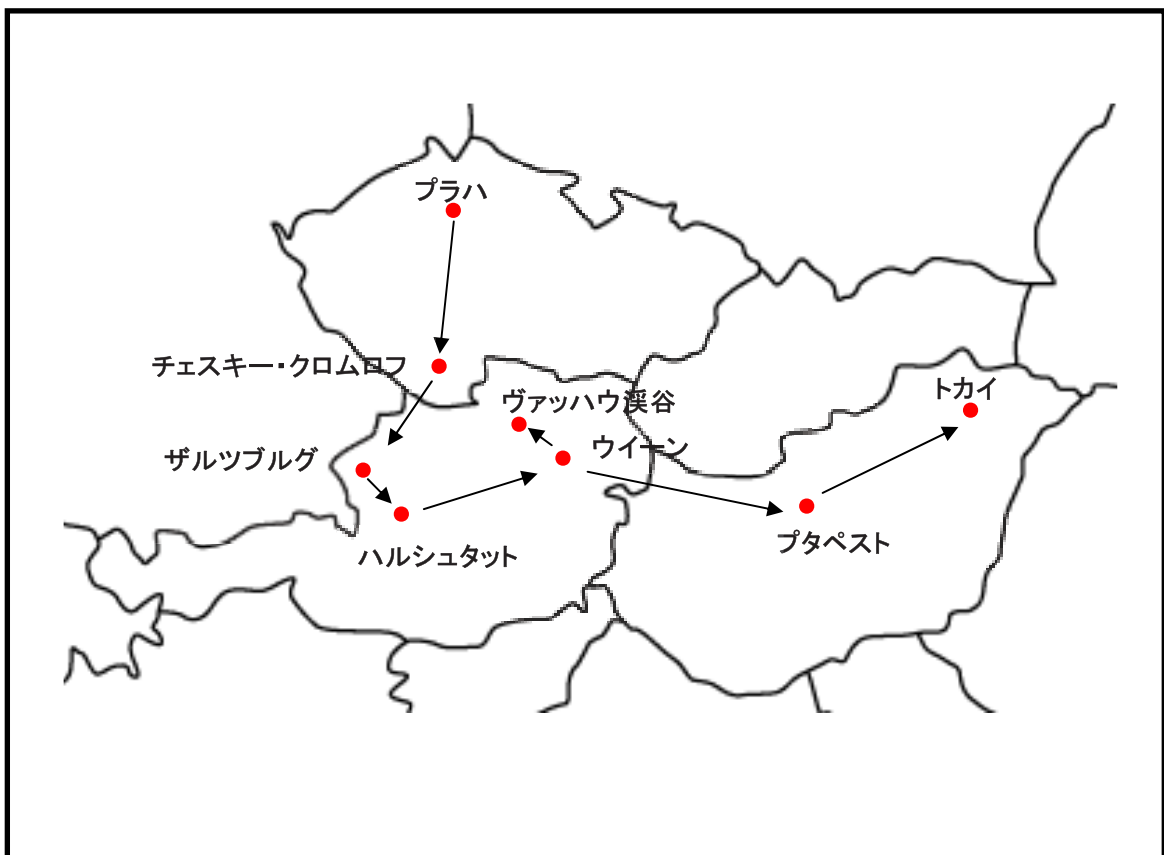
■ 移動経路・交通手段等

【航空機】

- ・往路：成田（日本）～チューリッヒ（スイス）経由～プラハ（チェコ共和国）
- ・復路：ブタペスト（ハンガリー共和国）～チューリッヒ（スイス）経由～成田（日本）

【バス】

- ・プラハ～チェスキー・クロムロフ（チェコ共和国）～ザルツブルグ～ハルシュタット～ウィーン～ヴァッハウ渓谷（オーストリア共和国）～ブタペスト～トカイ（ハンガリー共和国）



(2) 調査研究行程表

■ 日程表

日次	月日	都市	時間	交通機関	日程	ホテル（レストラン名称）
1	10月20日 (土)	東京（成田） 東京（成田）発 チューリッヒ着 チューリッヒ発 プラハ着	8:00 8:30 10:25 15:55 17:25 18:40 20:00	LX-169 LX-1498	集合 結団式 スイスインターナショナル航空にてチューリッヒ経由プラハへ 乗り換え プラハ到着 ホテル到着	モーベンピック 【プラハ泊】 (PIAZZO RESTAURANT)
2	10月21日 (日)	プラハ	9:00 17:00	専用車	●プラハ歴史地区 全市が世界遺産登録されているプラハ歴史地区の視察 歴史的街並みの保全と観光資源としての活用実態調査 (プラハ城、聖ヴィート大聖堂、黄金の小道、カレル橋 旧市街広場、ダンシング・ビル) ホテル到着	モーベンピック 【プラハ泊】 (U.S.V. JANE NEPOMUCKEHO) (POD KRIDLEM)
3	10月22日 (月)	プラハ発 チェスキー・クロムロフ着 チェスキー・クロムロフ発 ザルツブルグ着	8:00 11:00 15:30 19:00	専用車	●チェスキー・クロムロフ歴史地区 歴史的街並み保全の実態調査と公式訪問 【公式訪問内容】 ・代表者レクチャー：世界遺産登録と街並みの再生 ・現地案内・説明 (チェスキー・クロムロフ城・庭園、城下町) ホテル到着	ルネッサンスザルツブルグ 【ザルツブルグ泊】 (KRCMA SATLAVA)
4	10月23日 (火)	ザルツブルグ発 ハルシュタット着 ハルシュタット発 ウィーン着	9:00 12:00 16:30 19:30	専用車	●ザルツブルグ市内視察 ●ハルシュタットの文化的景観 文化的景観の先進事例調査と公式訪問 【公式訪問内容】 ・地域代表者との質疑応答 ・現地案内・説明 (ハルシュタットの街並み、岩塩坑) ホテル到着	ホリデーインシティウィーン 【ウィーン泊】 (RUDOLFSTURN) (CHINTAO)
5	10月24日 (水)	ウィーン発 メルク着 デルシュタイン発 ウィーン着	8:30 12:00 15:00 17:00	専用車 観光船 専用車	●フンデルトバッサー建築物 (クリントハウス、フンデルトバッサーハウス) ●ヴァッハウ渓谷の文化的景観 文化的景観の保全と観光活用の実態調査 (メルク、デルシュタイン市街、中世城址、修道院、ブドウ畑) ホテル到着	ホリデーインシティウィーン 【ウィーン泊】 (HOTEL POST)
6	10月25日 (木)	ウィーン発 ブタペスト着 ブタペスト着	8:30 12:00 18:00	専用車	●ブタペスト歴史地区とアンドラシー通り 芸術文化と民族色を活かした観光都市づくり視察 (王宮周辺、ゲッレールの丘、漁夫の砦、 マーチャーシュ教会、アンドラシー通り) ホテル到着	ブタペストメルキュール 【ブタペスト泊】 (BORLABOR)
7	10月26日 (金)	ブタペスト発 トカイ村着 トカイ村発 ブタペスト着	8:00 11:00 15:00 19:00	専用車	●トカイ地方の文化的景観 産業に根ざした街づくり調査と公式訪問 【公式訪問】 ・代表者レクチャー：Tokaj Historical Wine Region (ブドウ畑、農家の町並み、ワインセラー) ホテル到着	ブタペストメルキュール 【ブタペスト泊】 (BONCHIDAI CSARDA) (KALTENBERG)
8	10月27日 (土)	ブタペスト発 チューリッヒ着 チューリッヒ発	7:00 9:45 11:30 13:00	LX-2251 LX-168	乗り換え スイスインターナショナル航空にてチューリッヒ経由成田へ	
9	10月28日 (日)	成田	朝着		成田到着。税関審査後、自由解散。	

3. 公式訪問先

(1) チェスキー・クロムロフ

対応者 : JAN VONDROUS (MR)
役 職 : Former chief magistrate of city Cesky Krumlov
住 所 : Info Centrum Cesky Krumlov (ATIC) nam,svornosti2,Cesky Krumlov CZECH
REPUBLIC
E-mail : infocentrum@ckrf.ckrf.ckrumlov.cz
HP : <http://www.ckrumlov.cz/infocentrum>
TEL : (420)380-704-622 FAX : (420)380-704-619

(2) ハルシュタット

対応者 : PETER SCHEUTZ(MR)
役 職 : Burgermeister
住 所 : Gemeinde Amt Hallstatt / See Strasse 158,84030 Hallstatt / Oesterreich
E-mail : burgermeister@hallsyatt.ooe.gv.at
HP : <http://www.hallstatt.at>
TEL : 0043(6134)8585 FAX : 0043(6134)8585

(3) 世界遺産スタディー・センター

対応者 : Dr. MICHAEL KURZ (MR)
役 職 : Geschäftsführer(世界遺産スタディー・センター所長)
住 所 : Weltkurerbe Studium Zentrum / Untere Marktstrasse 1 (Gemeindeamt)
A-4822 Bad Goisern
E-mail : office@basis.or.at
HP : <http://www.basis.or.at>
TEL : 0043(6135)20880 bzw. 8301 FAX : 0043(6135)8301 30

(4) 中央ザルツカンマーグート・ツーリズムス連盟 パート・ゴイゼルン・オフィス

対応者 : PAMELA FRIEDL(MS) / 役 職 : 観光局長
対応者 : MAG. BARBARA KERN(MS) / 役 職 : ゲストスタッフ
住 所 : Tourismusverband Inneres Salzkammergut Geschäftsstelle Bad Goisern /
4822 Bad Goisern, Kirchengasse 4
E-mail : info@inneres-salzkammergut.at
HP : <http://www.inneres-salzkammergut.at/alias/inneres-salzkammergut/en>
TEL : 0043 (6135) 8329-0 FAX : 0043 (6135) 8329-74

(5) トカイ

対応者 : NAGY JULIA(MS)
役 職 : irodavezeto
住 所 : Tourinform iroda - Tokaj / H-3910 Tokaj,serhaz u.1.
E-mail: tokaji@tourinform.hu
TEL/FAX : 0036 47 352-259

4. 調査団参加者名簿（敬称略、50音順）

氏 名	所 属 所 在 地	備 考
カヤマ ハジメ 亀山 始	(財)国際花と緑の博覧会記念協会 大阪市鶴見区緑地公園2-136	団 長
アラカキ ユキオ 新垣 幸男	(財)海洋博覧会記念公園管理財団 沖縄県国頭郡本部町字石川424	
アンドウ ヨシユキ 安藤 義之	西武造園(株) 東京都豊島区南池袋1-16-15	
イナガキ タケオ 稲垣 丈夫	(株)稲垣ランドスケープデザイン研究所 東京都府中市本町美好町3-12-2	
イノウエ タクシ 井上 忠佳	(N)日本都市計画家協会／(株)創建 名古屋市熱田区新尾頭1-10-1	
イノウエ カスミ 井上 和子	同上	
クマイ チヨジ 熊井千代治	(株)アルファ計画研究所 神奈川県横浜市中区宮川町3-83 イワサキビル	
クマイ マサコ 熊井 雅子	同上	
コウノ トシアキ 河野 俊昭	(財)公園緑地管理財団 東京都立川市緑町3173	
コマヤシ サトシ 小林 聖	内山緑地建設(株) 東京都中央区八丁堀2-11-7 MC八丁堀ビル3階	
サカイ カズエ 酒井 一江	(株)淡窓庵 東京都目黒区八雲5-10-1-202	
サカモト ナオキ 坂本 直記	(社)日本公園緑地協会 東京都千代田区平河町2-4-16	
ススキ ユタカ 鈴木 裕	(株)NIPPOコーポレーション 東京都中央区京橋1-19-11	
タイラ カズオ 平良 一男	(財)海洋博覧会記念公園管理財団 沖縄県国頭郡本部町字石川424	
タカハシ マサノスケ 高橋正之輔	アゴラ造園(株) 東京都練馬区高松6-2-18	
タキシマ テツヤ 滝澤 哲也	大島造園土木(株) 名古屋市中区栄1-10-34	
タマル ケイゾウ 田丸 敬三	東光園緑化(株) 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5	
ツネムラ ハリユキ 恒村 則之	(株)日本技術開発 東京都中野区本町5-33-11	
テラダ キヨシ 寺田 喜義	大津市役所 滋賀県大津市御陵町3-1	
ハットリ アキラ 服部 彰	大津市役所 滋賀県大津市御陵町3-1	
トノサキ コウチ 外崎 公知	(財)都市緑化技術開発機構 東京都千代田区外神田2-15-2新神田ビル8階	事務局
ススキ ヒロコ 鈴木 広子	(財)都市緑化技術開発機構 東京都千代田区外神田2-15-2新神田ビル8階	事務局
ヨシエ アサミ 四十栄麻美	トップツアー(株) 東京都港区虎ノ門1-26-5	添乗員

Ⅱ． 調査報告

総括報告

今回『中欧の歴史的風土の保全と活用に関する調査』のために周ったチェコ、オーストリア、ハンガリーは、中央ヨーロッパの国々である。

このうちチェコとハンガリーは、かつてソビエト連邦が存在した時代には、確か東欧と呼ばれていた。そこで思い出したのはソビエト連邦崩壊後に東欧の将来を予想した野田宣雄の文章にあった「東欧は歴史の長い期間にわたって、内外の多様な勢力が宗教問題とも絡まりあいながら不断に角逐を繰り返す不安定な地域であった」（マルクスの誤算一文藝春秋編）である。ドイツ人は狭間のヨーロッパと呼び、フランスやイギリスでは防疫線とも緩衝装置とも、あるいは防波堤とも呼んでいたそうである。そして「ドイツ、ロシアという大国の狭間にあって翻弄され続けてきた東欧諸国の悲しい運命」はなかなか避けがたい、といったような文章であった。

そのような地域にあって歴史的風土や文化的景観という難しい代物をいかに残しているのか、誠に興味のある課題を抱えた視察であった。そしてその二国に隣接する、というよりまるで挟まれたような国、オーストリアは自由主義の国だったとはいえ、以前にはやはり前出両国と同じように翻弄され続けてきたことに変りはない国（と認識している）であって、そこにいかなる差異があるのか。今回はチェコから出発してオーストリアを通り、ハンガリーで終わるという“陰－陽－陰”とでもいえるような比較のし易いルートであったことも誠に幸いであるように思えた。

前置きが長くなったが、結論を言う。共産圏の二国もEUに参加の時期こそ遅い（2004年の加盟で今はまだユーロは使っていない）けれども、オーストリア（EUは1995年に加盟）となんら差異は感じられなかった。感想は“陰－陽－陰”のような感じではなく“優秀－優－良”といったような感じであった。

即ち同じような感じで見聞きできた、ということである。一つの国に二日間ずつしかいなくて何が分かるか、といわれそうだが、『百聞は一見にしかず』である。一見して、なおかつ二・三聞すればなおいい。行って、見て、何かを体験して、関係者の話を聞いてくる。それだけでもかなりの部分は分かる。

詳しい内容はそれぞれの地域ごとの担当者の報告に譲るが、参加された皆さんの思っていることは同じで、行ってよかった、よく分かった、であろうと思う。私もそのよく分かった部分を少し書いて、今回の調査の総括に代えさせていただく。

さて、では何がよく分かったかということであるが、プラハ歴史地区のように街全体が世界遺産（なんと866haが登録対象地域）になっているところは、国なり市なりがきちんと保存計画を立て、法を守らせるようにすればいいであろうが、公式訪問をしたチェスキー・クロムロフ（チェコ）やハルシュタット（オーストリア）あるいはトカイ（ハンガリー）のような村的なところは、ドイツ、フランスなどのほかのヨーロッパの国々と同じように、いや日本とも同じように、いわゆる『村おこし』的なことができているかどうか、に掛かっているように思えたことである。

すなわち、それができる（熱心な）人がいるかどうか、そしてそれを展開できる組織があるかどうかである。

チェスキー・クロムロフは前（1990年から12年間）の市長さんが説明、案内をしてくれた。壊れた建物を修復（一部は売却することで）し、基金をつくり、様々なイベントを仕掛け、そして将来のあるべき姿も描いていた。彼が最初に話したことはズデーテン（Sudeten）を知っているか、ということであった。これこそ先に述べた翻弄された東欧であろう。ドイツ人のいなくなった後、チェコ、ルーマニア、ロシアから貧しい人々が入り建物は荒れ果ててしまったそうである。修復はここからのスタートである。それを踏まえた上でのチェスキー・クロムロフだ、と言いたかったのだと思う。

ハルシュタットもまた組織がしっかりしているようであった。ここには世界最古の塩坑があり、ヨーロッパ最古の鉄器文化を生んだという伝統ある場所のせいか、案内してくれたバット・イシュル市の担当部局の責任者であるその女性は民族衣装で自転車に乗って現れた。ここでの驚きは、世界遺産に登録前は100万人だった観光客が、登録後には40万人に減ったということである。その代わり、以前は駆け足で通り過ぎていた（滞在時間は約1時間）人たちがゆっくりと見てくれるようになった（約5時間）と胸を張っておられた。面積が限られた駐車スペースがそうさせているようであった。

これら二つの公式訪問地に比べ、トカイのツーリストオフィスの女性は大学で専門コース（観光？）をとられたということであったが、ぶどう園とワイナリーという割に御しやすい対象であるにもかかわらず、「道路が近くにありそこを走るトラックの排ガスに困っている」だとか、「近くに発電所計画があり心配している」といったマイナス面ばかり強調していた。日本のように観光産業にしてやられることはないと思うが、だれが地域をまとめていくのか、今後が少し心配であった。ただ、ここでの通訳の方の説明がよくわからなかったため、こちらの理解不足ということもあるかもしれない。

基本的に住んでいる方が、社会の急激な変化を求めず伝統や文化的景観を守ることが当然と思っているヨーロッパにあって（チェコの通訳のダーシャさんは文化的景観を守れないのは野蛮人だ、と言ったそうである）、遅ればせながらとはいえハンガリーもまたEUの一員として同じ道を辿って行くのではなかろうか、という安心感もある。

通訳の話のついでに、以前の経験からも言えるのではあるが、このような訪問の成果は通訳の能力と人柄によるところが大きい。Dさんは家から新聞を持ってきて、プラハでは1週間以上にわたってTVや新聞で新しい図書館の設計がその景観に相応しいかどうか議論している最中であることを教えてくれた。訪問先でのこちらの質問もちゃんと伝えてくれた。ウイーンのOさんは私の質問を相手には伝えず「その件は後で皆さんに私から説明します」と言った。しかしその説明はなかった。質問内容は野蛮人の件である。彼はその質問は失礼だと思ったのであろうか、それとも……。ブダペストの通訳のZさんは、ハンガリーの人で自国内にいて日本語を学んだすごい人ではあったが、翻訳の日本語がよく分らなかった。

こちらの訪問理由を理解し、平等な立場で通訳をしてくれる人はなかなかいないようで、ここらあたりが、言葉の異なる国での調査の難しいところであろう。もし、この報告書に至らないところがあるならば、この点を容赦願いたい。

なお最後に一言つけ加えると、非常に強いユーロを持つ統合されたヨーロッパ、EUの今日の姿があるのは、世界遺産をはじめ伝統文化を大切にした（もちろん食料自給率も非常に高い）自立した国々からなる連合体であることがベースにあるのではなかろうか。日本経済発展への道もまた伝統文化を守る、美しい住みよい国づくりではないかと思う。

世界遺産 プラハ歴史地区（その１）

１．はじめに

チェコ共和国の首都であるプラハは、周囲を丘に囲まれ、ヴルタヴァ川を挟んで両岸に発達した街である。ヨーロッパの中心に位置し、千年の歴史を有する美しい古都であり、古くから「黄金のプラハ」「百塔の街」「北のローマ」などと称されている。幸いにも第一次、第二次大戦の破壊から免れ、資本主義の開発の波にも巻き込まれなかった結果、ゴシック、ルネッサンス、バロック時代などの歴史的建造物が建ち並ぶとともに、モーツァルト、スメタナ、カフカが活躍した文化・芸術の街でもある。１９９２年、プラハの中心６地区は「プラハ歴史地区」として世界遺産に登録された。

プラハは近年、ヨーロッパの観光都市としヴェネチアに次ぐ賑わいを見せているといわれている。そのプラハの歴史的景観や文化財、街並みの保全の現状について報告する。

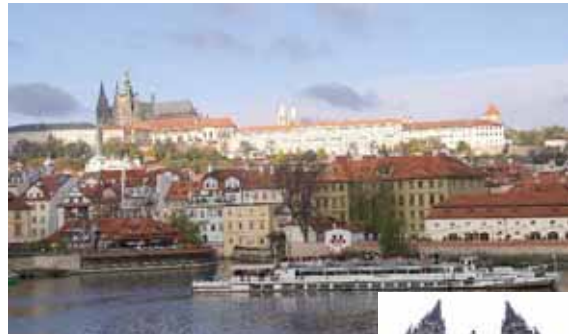
２．プラハ歴史地区の概要

１）プラハ市の人口等

- ・面積 約４９６平方ｋｍ
- ・人口 約１２２万人

写真－２

プラハ市発祥の地・旧市街広場。右側の建築はティーン聖母教会。ゴシック最盛期の傑作。上の写真は広場西側の旧市庁舎の塔。



写真－１ プラハのシンボル・プラハ城。右は聖ヴィート大聖堂。ゴシック様式の建築。



２）プラハ歴史地区のデータ

図－１
歴史地区（黒線内）

- ・遺産名 プラハ歴史地区
英語名 Historic Centre of Prague
- ・遺産種別 文化遺産
- ・登録基準 (ii) (iv) (vi) *
* (財) 日本湖ユネスコ協会連盟：「登録の基準」参照
- ・登録対象面積 Core zone：８６６ha
Buffer Zone：８９６３ha
- ・登録年月 １９９２年１２月（第１６回世界遺産委員会
サンタ・フェ会議）



写真－３

プラハ城内にある黄金の小道。観光客で賑わっている。

3. プラハ市における文化遺産の保全・保護の取り組み

プラハ市の取り組みについては、「大阪府議会欧州行政調査報告書」を参考に、その要約を紹介する。



図-2 プラハ市街地「プラハ歴史散策」より。

1) プラハ歴史地区の現状

・プラハ歴史地区にあるチェコにおける一番重要な文化財、第1カテゴリーの史跡は29件あり、第2のカテゴリーの文化財で、保護の対象になっている建物は1500件ある。
・「重要文化財」と「文化財」のみを保護するのではなく、地域全体を保護している。

2) 建築規制

・保全・保護の根拠となっているのが「史跡遺産文化財保全保護法」であり、1987年に制定された。
・文化財のオーナーが改築する場合には許可が必要である。
・建造物の修復、復元には補助金を出している。助成は6000万チェココルナ。重要な文化財である場合は、国からの助成もある。



3) 市民と守るプラハの景観

・市民にできるだけたくさんの情報を提供することを基本理念としている。

写真-4

旧市街広場のカフェ。ティーン聖母教会のライトアップも美しい。

プラハを彩る歴史的建造物



写真-5 プラハ城・聖イジー教会。ロマネスク様式。コンサートが開かれる。



写真-6 ヴルタヴァ川に架かるカレル橋。橋の上は広場の様。



写真-7 アールヌーボー様式の市民会館。ホール、レストランなどがある。



写真-8 キュビズムの建築・黒い聖母の家。博物館になっている。

4. おわりに

プラハの歴史的、文化的景観を維持するため、修復と保全・保護のための建築規制が今も行われている。このような努力が功を奏し、プラハの街を訪れる観光客は、年々増加し年間370万に達するといわれている。我が国においても歴史的、文化的景観をまちづくり、地域の振興に活かそうという動きが高まりつつある。その意味で歴史と現代が共生する歴史都市プラハの実地調査は、短時間であったが大いに学ぶところがあったといえよう。

参考文献

- 1) 田中充子(2001)：プラハを歩く 岩波新書：岩波書店
- 2) 石川達夫(2004)：プラハ歴史散策 講談社+α新書：講談社
- 3) 田中充子(1999)：プラハ建築の森：学芸出版社
- 4) 平成17年度大阪府議会欧州行政調査報告書：http://nisimura.fugii.jp/nh_kaigaisisatu0507.htm

世界遺産 プラハ歴史地区（その２）

１．はじめに

プラハは、チェコ共和国の首都であり、人口約１２０万人の同国最大の都市である。その市街地中心部、ヴルタヴァ川の東岸の旧市街から新市街まで、西岸のフラツチャニ地区およびマラー・ストラナ地区、計８６６haが世界遺産の対象登録地区になっている。

日の視察ではあったが、土木屋の目から見た世界遺産都市「プラハ」について、１）世界遺産の舗装、２）世界遺産とバリアフリー、３）世界遺産と交通システム、４）世界遺産と自然災害について報告したい。

２．世界遺産の舗装

プラハの街は、路面電車の軌道も、車道も歩道も、そして、カレル橋の上も、旧市街広場もすべて、石貼り舗装のオンパレードであった。その貼り方には少しずつ違いがあって、軌道や車道はレンガ状手仕上げ石のまさに石畳、そして、歩道や広場は小舗石を使用してデザインを凝らしていた。



写真―１ 一般道路



写真―２ カレル橋

どのような断面になっているのだからと考えていたところ、たまたまカレル橋のたもとで、石貼り舗装の改修現場があった。その断面から、何層にもなった路盤の上に手割の石を並べ、砂目地を詰めているだけのものであった。

電気、ガス、水道、排水管などのインフラがどのような形で整備されているのかは分からなかった。



写真―３ 舗装断面

３．世界遺産とバリアフリー

前節でも述べたように、街中が石畳でできている以上、バリアフリーとかユニバーサルデザインとかをいうのは酷というものだろう。というよりは、プラハの人々、いや、ヨーロッパの人々は、生活の不便さよりも自分たちの祖先が長い間を掛けて築き上げてきた景観や伝統を大切にしているのであ

る。狭い道でも、あるいはガタガタ道でも、景観を守っているのである。

今の日本では、何百年も掛けて我々の祖先がつくり上げてきた伝統や風景を一瞬のうちに壊してしまう。もうスクラップ&ビルトはやめるべきである。早くアメリカナイズから離脱して、ヨーロッパの人々を見習うべき時がきているのではないだろうか。話が逸れてしまったが、カレル橋のそばの横



写真—4 カレル橋そば横断歩道



写真—5 旧市街広場の馬車

断歩道は切下げがなされていた。風景のよさに見とれるあまりか、石貼り舗装の歩きにくさはまったく気にはならなかった。旧市街広場には観光用の馬車が何台か用意されていた。時間があれば石畳の馬車の乗り心地を試したかった。

4. 世界遺産と交通システム

プラハ市内の交通は3路線の地下鉄と、市内全域を走っているトラムとバスである。バスはプラハ郊外や住宅地へ向かうものがほとんどで、市内ではあまり見かけなかった。調査団のガイドの話によると、地下鉄がプラハのメイン交通になるのではないかと思われる時期もあったが、2002年に発生した大洪水で、地下鉄にも浸水し長い間不通になった。そのため、トラムの人気が復活し市民の足になっているとのことである。



写真—6 市内を走るトラム



写真—7 古い建物の下を走るトラム

確かに古い街並みにはトラムが似合っている。また、写真—7のような景観は日本では絶対に想像のつかないシーンである。

車が増えて駐車場はどうなっているのかとガイドに聞いたところ、その建物に住んでいる人を優先に、建物前のスペース（写真—8）を1年間5000コルナ（日本円約3万円）で道路駐車契約をするそうである。



写真－８ 道路駐車場

５．世界遺産と自然災害



写真－９ 国土交通省資料より



写真－１０ 今回撮影

2002年８月、プラハ市内を流れるヴルタヴァ川が氾濫し、大洪水に見舞われた。左写真は国土交通省の資料による当時の写真であり、右は今回私がたまたま撮った写真である。これを見ると、一階部分がほとんど水に浸かっている。

当時の記録によれば、プラハでは約７万人の人々が避難し、プラハ市内の地下鉄は浸水被害で復旧に半年以上かかり、また増水した河川から下水道へ逆流し下水処理場が機能しなくなり、復旧までに約３ヶ月かかった。そして、世界遺産に指定された歴史地区もかなりの被害あったといわれている。

しかし、今回の調査で見る限り、その影はほとんど見られなかった。もともと建物の基礎が石でできていること。また、観光が大きな産業になっていることから、復旧が早かったのかも知れない。いずれにしても、世界遺産に被害が小さかったことは幸いでした。

６．おわりに

世界遺産に登録されているプラハ歴史地区は８６６haと広域であり、プラハ城を始め各所に１１世紀から１８世紀にかけての様々な時代様式の建築物が残されている。そんなところを１日で見て回るのはとても無理である。いつか改めてじっくりと見たいものである。

参考文献

- １）平成１４年度国土交通白書：コラム・事例「２００２年の世界の洪水」

世界遺産 プラハ歴史地区（その３）

ー 先人が残した遺産に誇りと情熱で支えられた街プラハ ー

プラハの街は、ヴルタヴァ川を挟み、プラハ城を中心とした左岸と、旧市街、新市街が広がる右岸に分けられる。



モルダウ

ヴルタヴァ川左岸に広がる小高い丘の上に建つプラハ城は、ゴシック様式の聖ヴィート大聖堂を中心に旧王宮、聖イジー修道院、美術館、黄金の小路、ダリボルカ塔などが並ぶ。城というより街のような印象を受ける。聖ヴィート大聖堂は、ゴシック様式によるキリスト教の教会堂建築の特徴が現れており、先の尖ったアーチ、大きな窓、高い塔や柱を有し、ステンドグラスや彫刻が施されている。特に見応えがあるのが西側廊内の礼拝堂のステンドグラスで、左右6つのうち左側一番奥の礼拝堂にある「聖キリルと聖メトディウス」が有名である。旧王宮は、16世紀まで歴代の王が使用した宮殿で、マリア・テレジアの時代にロココ様式に改修され、3階にあるヴラディラフホールとよばれる柱のない大広間では馬術競技なども行われていた。現在は戴冠式などの国家行事が行われている。



右岸の旧市街は、広場を中心にカラクリ時計のある旧市庁舎、ティーン聖母教会、聖ミクラーシュ教会、火薬庫、市民会館といったゴシックからアールヌーボーまでの様々な建築様式が並び、土産店、カフェ、レストランなどが集中しプラハで最もにぎわう場所である。街には石畳の細い路地があり、中世の街並みの趣がよく現れている。



橋の上のオルガン弾き



プラハ嬢

プラハは14世紀カレル I 世の支配により繁栄を極めた。その後、フス戦争の混乱により民族の自由が奪われ、19世紀後半民族運動が高まり独立を迎えた。第二次世界大戦後は、ソビエトの支配下に置かれ、その後の激動の時代を経てチェコ共和国が成立した。戦火により壊滅的打撃を受けたところもあったが市民の努力により復元された。



石畳の補修



ダンシングビル

権力者も数多く入れ替わり戦争もあったけれども、街には各時代の建築様式の建物が残されており、そのことが大変不思議に思えた。我が国の戦国時代などは、権力者が敵の城を焼き払い石垣や堀ぐらいしか残されていない。

これだけの古い建築がどうして保護され残されてきたのだろうか。

先ず第1に建物を構成する材料が石材を中心とした堅固な材料でできていること、第2に2つの世界大戦を免れたこと、第3に文化財を大切に残そうという市民の気持ちが強く民族の誇りと感じていること。第4に行政が深く保護に力を注いでいることなどがその理由である。そのため建築家や歴史その他多くのプロフェッショナルで構成される委員会が、建物の新築や改築、模様替え等を細かくチェックし許可無しには一切の工事ができないようになっている。

そこで生活している市民はどうしているのだろうか。残念ながら室内まで覗くことはできなかった。何世紀も前につくられた建物は、現代の生活様式とは異なり使いづらい。ガイドに聞いたところ、その時代に合わせて少しずつ模様替えはしているそうだ。ただし、大きな模様替えは許可が必要だということだ。特に困るのは、電気、ガス、水道の配管だそうだ。

さて、プラハで話題沸騰中に新しい図書館のコンペ入賞品を紹介しよう。著名な建築家のデザインとか？宇宙船？きのこ？アメーバー？プラハは古い建物の保全だけではないようだ。



プラハの新図書館計画



同左

世界遺産 チェスキー・クロムロフ歴史地区（その１）

１ はじめに

チェスキー・クロムロフは、オーストリアの国境近くに位置し、チェコの南ボヘミア地方にある美しい街である。大きく屈曲するヴルタヴァ川に抱かれたクロムロフの旧市街は、中世の雰囲気そのまま残しているとして、１９９２年に世界遺産に登録されている。登録対象区域は、クロムロフ城とその城下町で約 ５２haを有し、１５,０００名余りの方々が生活している。ちなみに、チェスキー・クロムロフの名称の由来は、チェスキーが「チェコの」、クロムロフが「古ドイツ語の Chrumbenowe（曲がった川辺の未開墾の草地）」からきていると言われている。



写真－１ チェスキー・クロムロフ

なお、チェスキー・クロムロフは、オーストリアのザルツブルグ、エストニアのヴェネチア、スペインのトレドとともに世界的に人気の高い観光地となっている。

２ 世界遺産地区の概要

１）小史

チェスキー・クロムロフは、１３世紀に南ボヘミアの有力な貴族であるヴィーテク家によってクロムロフ城が建設されたのをきっかけに、小さい町が次第に発生した。１６世紀になるとロジェンベルク家がこの地域の支配者となり、最も栄えたと言われている。１８世紀にはシュヴァルツエンベルク家が支配するようになったが、１９世紀になると Hluboka 城を建築して引っ越した。２０世紀には、第一次及び第二次世界大戦に見舞われ、その後は社会主義政権の支配下に置かれた。

このように、チェスキー・クロムロフは、南ボヘミアの支配者の影響を受けつつ、１４世紀から盛んになった手工業と商業を中心にして穏やかに発展してきたが、社会主義政権下でも国境地域に近いという地理的理由により積極的な開発事業が行われなかったことから、中世の美しい街並みが良好な状態で保たれたと言われている。



写真－２ 中庭より眺めたチェスキー・クロムロフ城



写真－３ 旧市街地より眺めたチェスキー・クロムロフ城

2) 城築の経緯

13世紀初頭に最初に建てられたクロムロフ城は、支配者となったロジェンベルク家、エッゲンベルク家、シュヴァルツエンベルク家へと変わるたびに増築、改修が重ねられた。そのたびに西へ西へと増築が施され、最終的には5つの中庭からなる大宮殿となった。さらにその西側にも広大な庭園が造成された。14世紀から17世紀にかけて増築や改修が行われたため、室内はゴシック、ルネッサンス、バロック、ロココの各様式で装飾された。18世紀には室内装飾が一段と華麗になったと言われている。



写真－4 チェスキー・クロムロフ城（15世紀）



写真－5 チェスキー・クロムロフ城（17世紀） 西側に増築



写真－6 チェスキー・クロムロフ城（19世紀） さらに西側に増築

3) 街並みの状況

クロムロフ城から見下ろす旧市街地の全景は、オレンジ色の屋根と白色を基調とした壁のコントラストが美しい建造物群になっており、まるで街全体が絵画のような印象を受ける。市街地に入ると、中央に聖人像の噴水のあるスヴォオルノスティ広場を中心に石畳の路地が入り組んでいる。散策してみると、年代を感じさせる建物、古い様式と思われる装飾、石を刻んだ古い紋章、建物に囲まれた石畳の中庭を見ることができ、まるで中世の歴史が息づいている感じを受ける。なお、旧市街地を抱えているU字型のヴルタヴァ川はプラハの街へと続いている。



写真－７ チェスキー・クロムロフ城より
見下ろした旧市街地



写真－８ 石畳の路地と旧市街地

３ 保全・活用に関する対策

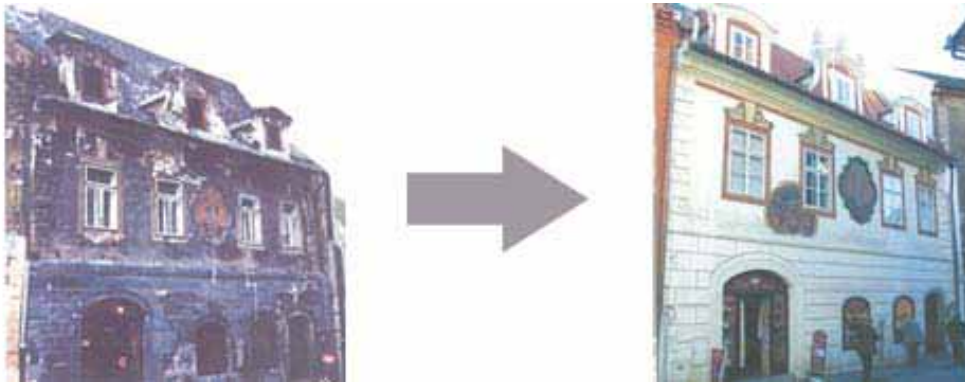
１）市街地の保全・活用対策

共産党体制の崩壊に伴って、民主的に選出された市長は、手始めに、チェスキー・クロムロフを「観光の街」にするため、旧市街地にある３００戸の所有権を獲得し、管理財団を設立して修復に当たらせている。市では、中世の美しいたたずまいを今一度再現するため、管理計画を作成して取り組んでいる。しかし、修復するための資金が少ないため、あらゆる経済的な援助を求めている。国からの補助金もいただいているが、それでも足りないため住宅を求めている方々に市が所有している未整備の住宅を安値で販売して修復の資金に充てている。住宅を購入した方々には街の景観に配慮する等の修復条件を付している。また、市では、建物以外の工作物についても昔ながらの景観になるような修復をしている。なお、街の風景（デザイン）に合わない企業等の建築物に対しては町外れに配置するなどの措置を行っている。

市では、経済的援助を期待して、１９９２年に「クロムロフ城と旧市街地」の約５２ｈａを世界遺産に登録したが、ユネスコからの援助はほとんどなかった。しかし、世界遺産の登録は「文化的に価値のある観光地」として世界中から高い評価を受けるようになった。今では、多くの美術館やギャラリー、歴史的なレストランやカフェ等が経営され、各種音楽祭やバラ祭りなども行われており、観光客も増加傾向にある。最近では、日本人の観光客が多くなっているようである。なお、クロムロフ城の修復は国が行った。

２）建築物の修復例

１６世紀に栄えていたチェスキー・クロムロフは、第二次世界大戦によって産業が大打撃を受けたことからゴーストタウン化し、建物が壊れたり、はがれ落ちたりして街全体としても廃虚の状態であった。そこで、市では壊れた建物を修復するため、中世の面影を抱かせるようなマスタープランを作成して修復を始めた。その改修した一例を示すこととする。



写真－９ 建築物の修復例（１）



写真－１０ 建築物の修復例（２）

３）当該地区の課題

文化的に価値の高い観光地として世界中から評価を受けているチェスキー・クロムロフではあるが、それなりに、いろいろと課題も抱えているようである。

① 人口１５千人の街に年間１５０万人の観光客が訪れる。しかもそのほとんどは日帰り観光客である。市では、人口、市街地の規模、生活の安定等から年間の観光客は３０万人程度が適当と考えているようである。これだけの観光客が訪れると、文化財が保全できるのか、あるいは市民生活が破壊されるのではないかと心配している。

② 観光客が年間１５０万人訪れても、市に入る財源は駐車場収入（全財源の約９０％）がほとんどで、微々たるものである。今後も市街地の建物や工作物等を継続して修復するための資金が必要なだけに、観光客からの収入を得る方法を考慮中とのこと。

③ クロムロフ城の庭（野外）に回転式の観客席（７００人収容）が設置され、１９５０年から特別劇場として使用されている。この劇場について、「文化財」として取り扱うべきか否か、単なる野外劇場の観客席として取り扱うべきものなのか、という論争が起こっている。最近、ユネスコも興味を持ち始めているだけに取扱いを間違えると大変な問題となりそうと懸念している。（過去に世界遺産を取消された例があるだけに）



写真－１１ 論争になっている回転式観客席

4 終わりに

チェスキー・クロムロフは、13世紀初頭にチェコの貴族によって建設されたクロムロフ城を中心にして、小さな町が次第に発生し18世紀まで発展してきた街ではあるが、戦時中や社会主義体制下でも大きな被害を受けることなく、中世の雰囲気をほとんど保っていたことが大きな資産（歴史的な文化的景観）になったような気がする。また、民主的に選ばれた市長が、「観光の街づくり」を経済振興の政策に位置づけて建築物等の修復活動を展開し、市民ぐるみで取り組んできた結果が、今となっては世界中から「文化的に価値の高い観光地」とか「世界で最も美しい街」と評されるゆえんではなかろうか。

日本国内でも歴史的風土や文化的景観の持続的保全や活用方法について関心が高まっているだけに、チェスキー・クロムロフの地道な取り組みや考え方を関係者が今一度研究して日本型の文化遺産を築き上げていきたいものである。

今回の調査に参加して、歴史的風土や文化的景観の価値がいかに大切なものであり、重要なものであるかを改めて認識する機会に恵まれたことを感謝している。

参考文献・資料

- 1) わがまま歩き オーストリア ブダペスト プラハ：ブルーガイド 2007
- 2) Yahoo Japan に掲載されているチェコ チェスキー・クロムロフに関するホームページ（平成19年11月30日現在）
- 3) The Story of krumlove : Bryce Belcher 2005

世界遺産 チェスキー・クロムロフ歴史地区（その２）

１．はじめに

チェスキー・クロムロフは、チェコスロバキアから１９９３年に分離したチェコ共和国（面積が北海道と同規模で人口が約２千万人）の南西に位置し、西側がドイツ、南側がオーストリアに隣接した、ヴルタヴァ川沿い岸にたたずむ町である。

世界遺産チェスキー・クロムロフは、１３世紀に築かれた城を中心に発展した町で、１９９２年に町全体が文化遺産として登録され、現在は年間１６０万人もの観光客が訪れるチェコ有数の観光名所となっている。



図 - １ チェスキー・クロムロフの位置

２．チェスキー・クロムロフについて

１）世界遺産登録地区の概要

チェスキー・クロムロフは１３世紀から１４世紀に掛けての手工業と商業の発展とともに、１６世紀のロジェンベルク家や１８世紀のシュヴァルツェン家の支配下において５００年にわたって穏やかに発展したことにより、中世の美しい町並みが残されているが、時代の変遷に翻弄された町でもある。

１９２０年に町の名前が、チェスキー・クロムロフと改められたあと、第二次世界大戦において１９３８年にドイツ軍に占領され、１９４５年に米国軍によって開放されている。その時に町の住民であったドイツ人は全てドイツへ移り住んだことにより住民が激減した。１９４９年にはチェコスロバキアの国家によって城が没収され、１９６８年にはソビエト軍が進駐した。



写真 - １ チェスキー・クロムロフ城から見た町の全景

１３世紀に建造された城や貴族の館は、その後、何世紀にも亘って様々な時代の様式に合わせて改築・増築され、細い街路や石畳の道、建物の壁画等、建造物の歴史が凝縮された、この町独特の雰囲気と美しさを形成してきたが、ナチス・ドイツによる占領と、その後の共産党の独裁体制化で伝統文化が否定されたことから、城は荒れ果て町はいたるところ煙突の煙と製紙工場の臭いがする薄汚れた町となった。

チェコが民主化された１９８９年、城修復の責任者となったスラフコ氏が指揮をとり、城やオベ

ラ劇場など歴史的建造物等の修復がなされた。

2) 保全・活用に関する政策について

共産党時代の45年間に破壊された町には観光産業がなく、気候的に農業も不向きであり、経済の柱は小規模の工業で1200人ほどの工場労働者がいるだけのさびれた町であったが、社会主義から民主主義に変わり観光客は7倍にも増えた。

そのような状況の下、1990年破壊された町を再生する計画として、大きな城と歴史的建造物を生かし、観光産業を起こすことを決めた。その実施機関として、町は国からの基金を基に財団を設立した。



写真－2 財団の事業説明
(前市長のヤンオンドロフさん)

3) 保全・活用政策の実施について

財団は、建造物の修復に当てることができる少ない資金で、最大の効果を上げるため、資金の循環を重視した。その方法は、傷みが少なく修復がやり易い建物から優先に修復し、修復した建物を地元住民優先に販売し民営の観光施設とした。売却で得られた収益で次に数件の建物を修復し、その繰り返しによって、速いスピードで町の修復が進められ、歴史的魅力にあふれた景観を取り戻すと同時に、観光施設の充実を図った。

また、中世の建築物を主体とした町であることから、町の雰囲気を変えないようにするため、店の看板の規制や車の進入禁止、拡幅のできない石畳道、駐車場の域外設置など観光の推進と折り合いの難しい問題もあったが、町は歴史的景観を優先し修復に取り組んだ。



写真－3
元ワイナリーを活用したレストラン

財団は、現在も観光産業の統括調整機関としての役割や観光インフォメーションセンターの運営、町にある観光用駐車場の90%を経営し、年間2千万円程度の収益を上げるまでに成長している。

3. おわりに

今回の海外研究調査団へ参加するに当たって、私の一番の関心事は、中世ヨーロッパの雰囲気と石の文化の歴史的悠久さを体感することで、二番目の関心は、調査対象域が旧共産圏であることでした。

これまで、写真やテレビでしか知らない中世ヨーロッパの建造物を目の当たりにし、その規模と重厚・壮麗さに驚嘆し、中世ヨーロッパの上流階級が、家に対し如何に時間と経費と労力をかけてきたかを窺うことができた。また、建物のいたるところに彫刻を施し、建物全体を芸術作品に仕立てている建造物が無数にあり、文化の違いを知る思いだった。

チェスキー・クロムロフへの道中、バスの窓から見えた共産党時代に建設された画一的な高層集合住宅が無味乾燥であるという理由から、外壁の改修工事が大規模に行われていた。もともとチェコ国民は共産主義を嫌っており、民主化がスムーズに進展したことにより、共産圏の名残は希薄であるとのことだった。

世界遺産 チェスキー・クルムロフ歴史地区（その３）

１．はじめに

財団法人都市緑化技術開発機構の第２７回海外研究調査団の一員として、９月２０日から９日間の日程でチェコ、オーストリア、ハンガリーの三カ国を、世界遺産に登録されている代表的事例を中心に訪問した。調査の目的は歴史的風土、文化的景観、まちなみの保全と活用について、その政策や取組みを調査することであった。その中で、単独の建造物でなく複数の建物が一群として、１９９２年に世界遺産として登録された、世界で最も美しい町のひとつと呼ばれているチェコの古都、チェスキー・クルムロフについて報告する。

２．チェスキー・クルムロフ歴史地区について

１）町の概要

チェスキー・クルムロフは中世から姿を変えることなく今に伝わったといわれている。首都プラハより南へ約１５０km、オーストリアとの国境近くにある人口約１４，０００人の小さな町である。町は蛇行するヴルタヴァ川に囲まれ、建物の屋根はほとんどがオレンジで統一され、石畳が連なる静かで雰囲気の良い町であった。町のシンボルであるチェスキー・クルムロフ城は、１３世紀に築かれ、様々な時代の様式に合わせて改築・増築され、様式が調和する複合建築となっている。そこから一望した町の景色はとてもすばらしいものであった。



図-1 チェスキー・クロムロフの地図



写真-1 チェスキー・クロムロフ城からの町の景色

2) 町の復興・修復について

現在はユネスコの世界遺産に登録されているチェスキー・クルムロフだが、このように美しく蘇ったのは比較的最近である。チェスキー・クルムロフの前々市長 Mr. Vondrous からお話を伺った。

民主化された1990年頃より、美しい町への復興が始まったが、その時の町は非常に悪い状態で、写真(Before&After)を見せていただいたが現在の美しい町とは程遠い状態であった。この荒れてしまった町は、第二次世界大戦後の1945年からの45年間は最悪であったという。大戦後は元々住んでいた人口の80%に当たるドイツ人のほ



写真-2 Mr. Jan Vondrous 前々市長

とんどがドイツやオーストリアに移り、変わってチェコやルーマニア、ロシアなどから新しい住民が移ってきた。しかし、彼らは貧乏で住居等を借りて生活していたため、建物の修復に当てるお金がなかったようだ。また政府も文化遺跡を軽視していたようで、町は荒れていったとのことである。

当時の市長である Mr. Vondrous はこの町の将来展望を考え、農業は海拔が高いため難しく、工業は近くにチェスキー・ブジェヨヴィツェという大きなまちがあり影響がある。当時、観光産業の存在しない町であったが、チェコで2番目の規模である城、チェスキー・クルムロフ城があることから、観光の町になると考え復興を行った。復興の多くはインフラ整備も含め町が行った。観光には波があるため、農業や工業も軽視はしなかった。

復興の資金として、まず国の文化財である町の建物の一部を民営化する手続きを慎重に行い、外国人に建物を売る(条件をつけて売ったようだ)などして修復の資金を作った。また(財)チェスキー・クルムロフ基金を設立し、町の補助金からスタートした。町にあるインフォメーションセンターもこの基金のものだ。遺跡のうちでもっとも価値があり重要と考える60の建物が修復された。その結果、1992年ユネスコの世界遺産に登録された。登録されることにより、町の大変よい宣伝となりお金も入るようになったが、他方そのままの形で維持・保存しなければならない義務がある。

3) 保全・活用について

維持・保存については、地方自治体を中心に県、文化省それぞれのレベルで行った。責任者は地方自治体のようだ。彼らは、荒れた街をゼロからスタートした自負もあり、最初から文化財を守る管理システムを構築しているとのことだった。

最近重要な役割(収入)を果たしているのが、基金が90%を管理している駐車場である。現在、年間に訪れる観光客は約150万人、将来はもっと増えることも考えられるという。これはビジネスとしてはとてもよいことだが、文化財にとって大変危険なことと考えている。年間の限度として30万人程度が理想と考えているようで、様々な可能性を考え調整したいと考えている。例えば、現在観光用の駐車場は二箇所あり、そこから歴史地区に入るルートも二箇所ある。これにもう一箇所、ホテル等を含む駐車場と新しい入口を設置することにより、観光客を分散させる。またインフォメーションセンターにより入場制限するなど検討しているようだ。

3. おわりに

チェスキー・クルムロフを視察した中で驚いたこと、興味深かったことは、首都プラハもそうであったが、世界遺産となっている町の建物に人が住んでいるということである。この町の約60%の人が観光産業で働き生計をたて、自分達の家も含む世界遺産となる町を維持・管理しているのである。

世界遺産 ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの 文化的景観（その１）

１．はじめに

ザルツカンマーグート地方は、オーストリアのザルツブルク (Salzburg) 市の南東に位置し、オーバーエスターライヒ州、ザルツブルク州、シュタイアーマルク州にまたがる。アルプスの氷河によってつくられた幾つもの湖と2,000m級の山々が織り成す広大な自然が広がり、標高が500～800mの高地であるため、昔はハプスブルク家の御料地として栄えたが、現在夏は水上スポーツやハイキング冬はウインタースポーツと、一年中客が絶えない観光地である。

また、1965年に公開された実話をもとにしたミュージカル映画「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台となった地としても有名である。ザルツカンマーグートとは塩（ザルツ）の御料地（カンマーグート）という意味である。名前の通り、約7,000年も前から岩塩を採掘し始め、現在でも採掘が続いている地域である。

ハルシュタットは、オーバーエスターライヒ州に属し、ザルツカンマーグート地方の最奥ハルシュタットゼーの西側の湖畔に位置する「ザルツカンマーグートの真珠」と呼ばれる風光明媚な町である。ハルはケルト語で「塩」、シュタットはドイツ語で「場所」を意味し、世界最古の塩坑「ハルシュタット塩坑」があり、その坑内から様々な遺品が発見され、ヨーロッパ初の鉄器文明である「ハルシュタット文明」の地といわれ、古代ケルト文明の再認識される一大契機となった場所でもある。なお、塩坑は現在も操業しており、現在は一般にも見学できる観光施設にもなっている。

ダハシュタインは ザルツカンマーグート地方南側ホーエル・ダッハシュタイン（2995m）を主峰とし、前述の3州にまたがるオーストリアのカルストの山塊で、東アルプスの一部である北部石灰岩アルプスの中では2番目に高い山塊で、ハルシュタット氷河などいくつかの氷河があり、今では夏冬問わず登山客で賑わっている。



図-1 ザルツカンマーグート主要交通網
（オーストリア政府観光局 HP より）



写真-1 ザルツカンマーグート地方の
湖と山々

２．世界遺産登録地区の概要について

- 1) 世界遺産名称：ハルシュタット-ダッハシュタイン・ザルツカンマーグートの文化的景観
(Hallstatt-Dachstein Salzkammergut Cultural Landscape)

- 2) 遺産種別：文化遺産 (Cultural Property) 顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群遺跡、文化的景観など
- 3) 分類：文化的景観 (Cultural Landscape)
- 4) カテゴリー：継続中の景観 (Continuing Landscape) 農林水産業などの産業と関連した有機的に変化する景観
- 5) 登録基準：(iii) 現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。
(iv) 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であること。
- 6) 登録範囲：オーストリア共和国オーバーエスターライヒ州・ザルツブルク州・シュタイアーマルク州
(ただし、中核地域として登録されているのはオーバーエスターライヒ州)
- 7) 登録年：1997年

3. 継続する景観の保全と地域の関係性

ハルシュタットでは経済の大部分は観光産業が占めている。生産会社が多く駐在しているわけではなく (Salinen Austria 社 (製塩会社), Hofmann Elektrokohle 社, SGL Carbon 社 (共に工業製品製造))、すべて中規模で、約 200〜300 人の労働力で、敷地は世界遺産の中心部の外側および緩衝地帯にある。



写真-2 ハルシュタット塩坑の入り口



写真-3 ハルシュタットの代表 (右側)

4. 保全・活用のために行われている活動と政策について

ハルシュタットの人々は、以前から無駄遣いとダンプングに関して厳しい規則を持っている。ゴミの分別も徹底している (紙、プラスチック、金属、有機物など)。それぞれの地域で下水道を持っておりその区域は独立している。建物や交通などは規則によって制限されており、特定の区域だけが多少緩和されている (高さ、サイズ)。

EU や連邦政府から環境と文化の保護に対して助成金が支給されている。

景観の保全と経済的な活動は一部に矛盾を生じさせているが、地域農業を有機農法に切替えるとともに生産物の品質を高めることにより、価格面で EU 諸国と対抗できるようにし、農村の景観を壊さず経済的活動も高めようとしている。

5. 世界遺産登録が地域に与えた影響について

1) 地域産業に与えた影響

地域産業への影響は特になかったようである。それは、観光が地域産業として永年発展してきたこと、自然・文化そして景観が高いレベルで維持されてきたことによるものである。地域の文化的景観に対する高い意識があったからであろう。

2) 地域住民に与えた影響。

世界遺産登録に当たって、ユネスコの規制などによって自分たちが思うような生活様式ができなくなることを受け入れることができるか、本当に世界遺産にふさわしいのか、それを維持することがオーストリアの法律に合致するののかということが重要な事柄であった。市長としても、ユネスコの規制を受け入れ、住民とともに文化的・自然的景観を保全できるかどうかを悩んだそう。だが、ザルツカンマーグートは登録されて10年が経過したが、それにより人々のライフスタイルは変化しなかった。登録されたことによって、若年層はそのことを意識し誇りに思っているとのことである。



写真-4 モーツアルトの母の生家
(ザンクト・ギルゲン)



写真-5 ザンクト・ヴォルフガング

6. おわりに

古代から岩塩を採掘している地域だが、現在の塩坑からの採掘は今後50～60年間は大丈夫だ。その付近でさらに採掘できる可能性も高いそうだ。しかし、永久に採掘できるかは疑問であることから、その対策を検討し始めている。

ユネスコが世界遺産として評価したのは、塩を取るという産業ではない。古代から岩塩を採掘していたこと、山々に囲まれ隔離された独特の文化と生活様式、街並みと建造物、そしてこの広大な大自然のもたらす景観、これらが一体となって世界遺産として評価されたのである。

世界遺産の登録前後で、年間の観光客の数は100万人から40～45万人と減少した。登録前は短時間滞在する近郊からの観光客が多かったが、登録後は世界各国から世界遺産を見るという高い意識を持って来る観光客が多くなり、自ずと滞在時間も長くなり宿泊客も増えた。観光収入は約25%増加した。

人口約1,000人のハルシュタットに多いときは1日に1万人以上の観光客が来て、あまりにも多すぎて店を閉めたこともあったそうだ。今日は、1日4,000人程度となり売上も約25%も増加した。駐車場を閉鎖するなどして観光客の入域制限を図るとともに、継続的な景観を保全するよう努力しているそうだ。

ここに住んで住民にとって、世界遺産登録による生活への支障は多少ある。しかし、この文化的景観を以前から自主的に保全してきたことには頭が下がる思いである。ユネスコもユネスコの規制を遵守していれば、自分たちの街の自主的な規制には口を出さないそうである。この街には古くから自主的な規制があり、そのことをユネスコも確認したことからだ。

現在日本でも数多くの地域や建造物が世界遺産登録の準備を行っているが、このような地域の住民が一体となって推進していかなければ、真の世界遺産といえないのではないだろうか。

世界遺産 ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの 文化的景観（その２） ― 世界で最も美しい湖畔の街 ―

１．はじめに

ザルツカンマーグート地方は、ザルツブルグ州、オーバーエスタライヒ州、シュタイアーマルク州の３つの州にまたがり、ハルシュタット、ダッハシュタイン、ザルツカンマーグートはユネスコの世界遺産として１９９７年に登録された。

この地方では先史時代から塩の採掘が行われており、古くから岩塩の町として栄えており、現在でも採掘は続いている。内陸国であるオーストリアでは、塩は貴重品だったため、中世の頃岩塩は「白い黄金」と呼ばれ、この地方を支配したザルツブルグ大司教や、ハプスブルグ家に莫大な富をもたらし、その繁栄を支える重要な資源であった。

また、ザルツカンマーグートは、２０００ｍ級の山々に囲まれた自然豊かな地方で、映画「サウンド・オブ・ミュージック」舞台にもなった場所であり、標高５００～８００ｍの高地にあるため一年中観光客の絶えない景勝地となっている。

２．ハルシュタットについて

１）略歴

１９９７年ユネスコの世界遺産に登録されたハルシュタットは、ザルツブルグの南東にある湖畔の街でその美しさは真珠に例えられている。ハルはケルト語で「塩」を意味しシュタットは「場所」を意味している。

ハルシュタットは、７０００年前に塩が発見され、古くから岩塩の町として栄えてきた。現在の人口は１０００人ほどだが、紀元前９００年～２００年頃はヨーロッパ文明の黎明といわれる「ハルシュタット文明」の中心地だった。

現在は塩での収入が低減し、観光による収入が大きな財源になっている。



写真-1 ハルシュタットの街並み

２）塩の生産方法と生産量の変遷

この街の人々は、以前は塩と木材の関係で生計を立てきた。木材は塩を精製する際の燃料として使用され、その調達・加工に従事する人々もかなり多くいた。しかし、ここ数十年で塩の精製技術が向上し従事者の人数も激減している。

５０年前は１４０人で２０万kgの塩を精製していたが、現在では２０人で４０万kgが精製できるようになった。（この製塩所では岩塩を水で溶かした塩水をパイプで山から降ろし、低地部で加熱精製を行っている。）

燃料としての木材も化石燃料にとって代われ、木材の供給で生計を立てていた人々は木の加工や家具製作に職業を変えた。

3) ユネスコの世界遺産に登録されてからの問題点

世界遺産に登録されるとユネスコの規約・規定を遵守することになる。すると、これまでの生活様式が一部ではあるが保持できなくなるという問題が発生してきている。また、ユネスコの規約・規定とオーストリアの法律とに齟齬が発生する場合もあり、その調整は重大な問題である。

地元代表との対談では、その具体的な手法まで聞くことはできなかったが、世界遺産に登録されてから10年、上記の問題解決に多くの努力がなされたことが伺い知れた。



写真2ー地元代表との対談風景(中央)

4) 観光化への対応

この地域は200年前からオーストリア皇帝の御用邸があり、夏になると皇帝をはじめ貴族や著名な人々が避暑に来ていた。そのため、観光ビジネスは古くから存在していた。その後、1980年代から急激に観光客が増加し、世界遺産になる前の時期には年間100万人にも達した。当時は1日に10,000人の観光客が訪れることもあり、店舗でも対応が追いつかず、ひどいときには閉店してしまうこともあった。世界遺産登録後は年間40～45万人ぐらいに減少している。観光客を減少させた一番の決め手は駐車場の制限であり、駐車場が満杯になるとそれ以上は街に入れないように規制している。観光客を如何に呼び入れるかに躍起になっているところから見ると賛否な問題であるかもしれない。

世界遺産登録前後では観光客の行動も変化してきており、以前は写真を撮ったりちょっと街を見たりで1時間程度滞在して帰る人が多かったが、世界遺産に登録されてからは「世界遺産を観る」という目的を持って5～6時間滞在する人が多くなっている。日本人や中国人の観光客はここ数年増加傾向にある。

5) 街並みと緑化

街並みを保全する規制は、世界遺産に登録される前から自主的に設けられており、この自主性は世界遺産の選考の際にユネスコの委員会にも大きく評価された。我々が訪問した日はあいにくの雪だったが、この雪も湖に捨てると自然破壊に繋がるということで、処理場に持っていくとのことだった。また、生活排水も湖に直接流すようなことは規制されている。家にはハンギングやエスパリエがあり、花や実が街のいたるところで見られ独特の景観をつくっていた。エスパリエについては今回の訪問した街の中では最も充実していた。



写真ー3 見事なエスパリエ

3. おわりに

ハルシュタットは、塩という産業を中心とした街の発展と独特な自然環境が合わさり、すばらしい景観をつくっていた。しかし、塩から収入は低減し、観光で街の経済が支えられるようになってかなりの時間がたっている。産業の衰退と観光化で景観を損ねた事例は日本でも見られるが、ハルシュタットがそのようになる可能性も全くないとはいえないと感じた。このすばらしい景観をいつまでも保持していこうと努力されている街の人々の姿勢が強く心に残った。

世界遺産 ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの 文化的景観（その３）

1. 地域の位置づけ

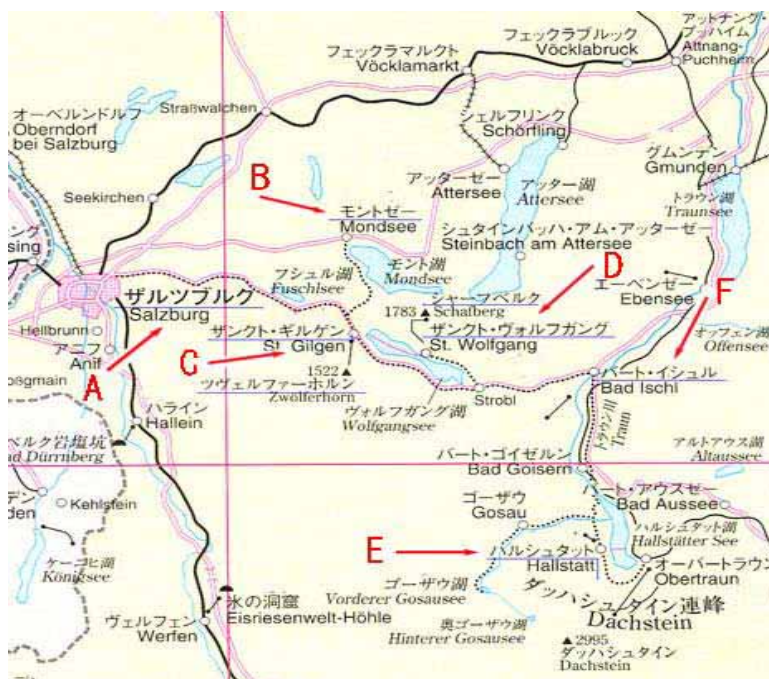
調査対象のハルシュタット^{*1,2}の存するザルツブルク郊外のザルツカンマーグート（「塩の御料地」を意味する、かつてのオーストリア帝国直轄地）地方とは、ザルツブルク州他３州にまたがる広範な地方を指し、岩塩の採掘と密接に結びついた場所である。７６の湖やダッハシュタイン山塊が織りなす多くの美しい景観が存在する（カラマツ、モミ、トウヒ、ブナ、トチノキ、ボダイジュ、ウツギ等）。この地域は、１９世紀以降、観光地としての価値を認められており、現在は就業人口の２／３が観光旅行業を含むサービス業、３％未満が農業と鉱業に従事、工業及び商業におよそ１／３が従事している^{*3}。

このうち、ハルシュタット湖周辺が「ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの文化的景観^{*4}」として、ユネスコの世界遺産に登録されている。世界遺産地域に含まれるのは、ハルシュタット、ゴーザウ、オーバートラウンとバート・ゴワーセンの４つの町であり、合計約１１，０００人の住民が居住する。

このうちハルシュタットでは、１９世紀以来近郊の塩坑で様々な遺跡が発見され、７～５０００年程前から岩塩採掘が始まっていたことが明らかになっている。また、紀元前６世紀に遡ることのできる塩坑もあり、これは現在操業が行われている世界最古の塩坑といわれている。人口約１，０００人弱の街は、ハルシュタット湖に接するダッハシュタイン山塊の急峻な山裾に伝統的な建物がへばりつくように並んでいるが、街には、１５世紀末の教区教会やゴシック様式の聖ミカエル礼拝堂などが残っており、他の建物も景色に溶け込むように昔の姿を保っている。現在では観光が主要産業であり、

美しい自然景観と数千年間に及ぶ岩塩採掘という基本的な人間の経済活動とが、有機的に発展して作り出してきた景観は、地元の厳しい建築規制などによって保全されてきたものである。

この地域は１９９７年ユネスコによって世界遺産登録基準のうち文化遺産として登録されたが、そのカテゴリーは文化的景観である。登録の基準となったのは、全体が調和して相互に有益な方法で融和した、優れた自然景観と基本的な人間の経済活動の証拠を含む科学的関心の傑出した例として、である（ユネスコの基準(iii)^{*5}(iv)^{*6}）。



ザルツカンマーグート地方

2. ハルシュタットにおける調査課題

今回の調査団の本地域における世界遺産調査の課題は、

- 1) 継続する景観の保全と地域の関係性

2) 保全・活用のために行われている活用や政策について

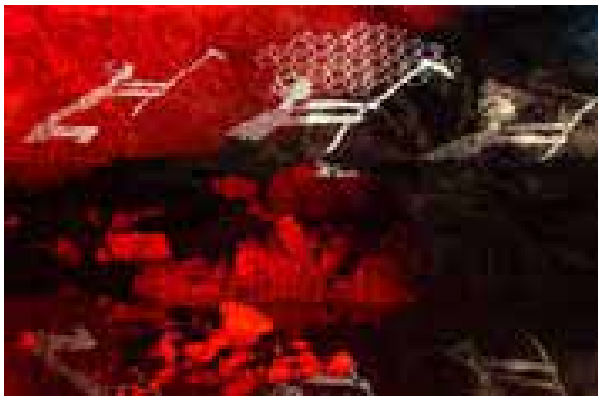
3) 世界遺産登録が地域に与えた影響について

4) 中小都市で歴史的文化的資産を活かした個性あるまちづくりを行うポイント

の4点であるが、それらに関する基本的事項については現地でのハルシュタット村長への質問及び Dr. Michael Kurz への文書での質問に対する回答で十分説明されているので、それを参照されたい。ここでは簡単な印象を述べる。

1) 継続する景観の保全と地域の関係性

この地域の新石器時代に遡る岩塩鉱とそれと関わる地域の歴史をバックグラウンドとしてこの地域の文化的景観が成り立っていることは、ガイドから説明を受けるまで、或いは SALTZWELTEN (SALINEN AUSTRIA 社の運営する博物館) を訪問しない限り理解できない。



博物館の展示

この見えない産業の重要度は低下したものの現在も引き続き地域の重要産業として維持されている。それに変わる

基幹産業として観光産業が、19世紀以来この地域を牽引してきたが、その観光資源は風光明媚な湖と山岳地帯の、

現在ある豊かな緑や、そこから切り出された薪が各戸の軒先に整然と積み上げられた様子も、16世紀の製塩業繁栄に伴うエネルギー危機（ハルシュタット周辺での木材の欠乏）の結果を引き継いだ景観（薪は国有林から切り出され、宅地規模に応じて支給され、それが整然と積み上げられている）であること等を知ると納得できるものとなる。この限られた土地に展開する文化的景観地区を長期に維持していくという視点からは、現在の産業の多くは、相容れない存在である。



冬の備え



整然と積まれた薪

2) 保全・活用のために行われている活動や政策について

この地域の世界遺産としての規制は文化的財産に対してであって、自然的側面は世界遺産的には義務を負っておらず、現状では、自然と文化的景観が統合された景観が一体的に保全されているものではないことには注意を要する。

建築規制はコミュニティレベルで実施されてきているのに対し、自然的側面は連邦標準の環境保護（自然は連邦のもの、文化は各政府のもの）やEU条約によっている。現状のこうした体制でも良好な景観は維持されているが、持続的に良好な景観維持のためには、今後はこれらを総合的に展開していく仕組みが必要である。

日本でも今までは文化的景観と自然景観が縦割り行政の中で取り扱われ、分離的に評価されてきた結果、種々の施策の投入にも関わらず大きな成果を上げることができずにいるのは同様である。両者をつなぐ手段として緑化技術は大きな役割を果たすことができる。

3) 世界遺産登録が地域に与えた影響について

事前の質問に対する回答では、世界遺産登録は、ローカルな文化の状況や地場産業への影響はなく、生活や環境は以前と同様に高水準で保たれており、登録後10年経過するが、ライフスタイルも変わることはなかったとしている。世界遺産への登録は数世代にわたって地域に影響を与えるプロジェクトであるといえる。若い世代が世界遺産登録の意義をよく理解しており、それを誇りに思っている。このことは変えがたい貴重な地域の財産であり、今後こうした世界遺産に対する前向きな意識が、訪問者に対する受け入れ側の行動にも反映され、新たな雇用創出や地域の持続的発展等の側面でよい効果を発揮することが期待される。

世界遺産登録前の観光入込客数が、指定後は半分以下に減少したとのことである。観光客の変動は景気や社会情勢によっても大きな影響を受けるので、それが世界遺産指定と直接に関係があるのかどうかを知ることはできなかった。しかし観光客数の減少にもかかわらず、従来はその滞在時間が1時間程度であったものが、現在は5～6時間となり消費総額は25%アップしたとのことである。

世界遺産登録は、結果として利用者増加を伴うことなく消費額増大に貢献したことになる。ハルシュタットの市街地面積は狭く極めて限定されており、利用者の受入れにも自ずと限界がある。そのコントロールをここでは、街の入り口近くにある公共駐車場の収容力で行っている。世界遺産登録による地域の個性の明確化は、観光産業に依存する地域において、地域への環境負荷を低減することを可能にしており、地域にとって賢明な選択となっているように見えた。世界遺産登録を準備している地域が、利用者数増加のみを当てにしているとしたら問題が多い。

4) 中小都市で歴史的文化的資産を活かした個性あるまちづくりを行うポイントについて

Dr. Michael Kurz は回答の中で、地域計画の成否は、「住民が自を“我々”と呼ぶ時にのみうまくいくこと・・・」と述べている。歴史的・文化的・自然的資産を活かした個性あるまちづくりを円滑に進めるには、暗黙のうちに市民の合意がなされていることが前提となる。それなくしては結局個性あるまちづくりというのは実現しない。この点が十分でない場所でのまちづくりは、地域に混乱と破壊をもたらすことになりかねない。中欧各国の世界遺産地区の修復等を見て感じたことは、世界遺産レベルの歴史的文化的資産を活かした個性あるまちづくりを実現するには、中小都市の財政力のみでは限界があり、そのような資源を今まで維持してきた地域に対して、国家的レベルからの各種の支援が不可欠であるということである。また中山間地域の活性化の視点からも、世界遺産に至らないレベルの地域資産の修復等に国家的な支援が必要だと思われる。

訳注

*1 - 調査対象地域: Hallstatt- Dachstein/ Salzkammergut alpine region (Austria)

*2 - 「ハル」はケルト語で「塩」を意味し、「ハルシュタット」は「塩の街」である。

*3 - 税収のうち観光から上がるものが60%、塩の会社による国税納入還付金収入が30%、塩の直接の収

入が 10%

- *4 - 文化的景観 (Cultural landscape) とは、人間と自然との相互作用によって生み出された景観をいう。
この場合の相互作用には、庭園等のように人間が自然の中に作り出した景色、あるいは田園や牧場のよう
に産業と深く結びついた景観、さらには自然それ自体にほとんど手を加えていなくとも人間がそ
こに文化的な意義を付与したもの (宗教上の聖地とされた山など) が含まれる。
- *5 - (3) 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠
- *6 - (4) 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例



Studienzentrum BASIS
Untere Markstrasse 1
4822 Bad Goisern

Bad Goisern, 7. Januar 2008

Questionnaire

The overseas research delegation

【Introduction】

The objective of our delegation is to research the overseas policies of parks and open spaces in addition to its greenery environment. And we would like to visit the representative and cultural landscape registered in World Heritage to study the scheme of application and preservation of cultural landscape in your country.

With the fact that there is a long history and tradition in Japan, we believe that the LANDSCAPE harmonized with nature and historical and cultural assets is the frame of Japan. Therefore, we would like to aspire to preserve and tell these historical and cultural features as national assets to the next generation.

It would be very thankful for your advices in order to promote regional tourism and vivid communities, and to create the city applying cultural landscape in Japan

【Questioners】

1. Prior to our visit, we will research the summary of World Heritage. We would like to know about details listed below.

(1) About the historical and cultural assets evaluated as World Heritage.

Text of the nomination as world heritage:

The Committee decided to inscribe this site on the basis of criteria (iii) and (iv), considering that the Hallstatt- Dachstein/Salzkammergut alpine region is an outstanding example of a natural landscape of great beauty and scientific interest which also contains evidence of a fundamental human economic activity, the whole integrated in a harmonious and mutually beneficial manner.

*Hallstatt- Dachstein/Salzkammergut alpine region is an **organically evolved landscape**, an outstanding example of a natural landscape of great beauty and scientific interest which also contains evidence of a fundamental human economic activity, the whole integrated in a harmonious and mutually beneficial manner, due to the salt mining for thousands of years.*

The region was inscribed in 1997 by UNESCO considering that it is a continuing landscape, where still an active social role in contemporary society closely associated with the traditional way of life is retained, and in which the evolutionary process is still in progress.

Hallstatt-Dachstein Salzkammergut Cultural Landscape meets criteria iii and iv on the list. To date (2007), 50 properties on the World Heritage List have been included as cultural landscapes.

(2) About the value of the historical and cultural assets.

Salzkammergut has its name from salt (literally salt chamber). The region hosts today the world's oldest existing salt mine. First evidence of salt date back to the neolithic time, the first findings in the mine are from 1500 BC, where mining was already a business. Hallstatt coined the name for the period between 800 and 400 BC (Hallstatt time, early iron age), because of the stretched cementary of a prosperous population up on the mountains close to the mine. Salt was exported near and far, Hallstatt was a centre of commerce. After the roman occupation mining slowly disappeared, we think that it ended in the 4th century AD. Over 1000 years we have no word from Hallstatt until the Habsburg Dukes started mining anew. Hallstatt again rose to a major salt location in Austria. In the 16th century an energy crises (lack of wood around Hallstatt) forced the Habsburgs to open a mine in Ischl an finally build a pipeline to the 40 km distant Ebensee, where a completly new saline was erected. 1750 saw a catastrophe for Hallstatt, as the town burned down and was rebuild only slowly and in a smaller scale, the time of prospering was over. In the 19th century romantic tourists discovered Salzkammergut, which is still today the most important economic base. Salzkammergut area is the cradle for archeological and geological science in Austria. Starting with Alexander Humbold well before 1800 numerous scholars examined the mountains. Many wordlwide used terms of geology were first discovered in Salzkammergut (Dachstein limeston, hallstatt limestone, Gosau layer etc.)

(3) About the frame of the preservation system for World Heritage.

Salzkammergut ist embedded in many different preservation and conservation standards, either on the cultural or on the natural side. Unfortunately both sides are not combined, and especially as Salzkammergut is literally a cultural property, regulation of world heritage do not oblige on nature. On the cultural site we have regulation of building within the community, a government organization preserving architecture (Bundesdenkmal; Denkmalschutz), the world heritage convention, to mention the most important and some other. On the natural side we have federal standards (nature ist federal, culture is govermental) of environment protection (Naturschutz) and different EU-treaties, like Natura 2000.

(4) Regional information(Population, an age structure, an industrial etc.)

*World heritage region comprises 4 towns: Hallstatt, Gosau, Obertraun and Bad Goisern, together around 11.000 inhabitants,
Age Structure:*

Age	percentage
0 bis 19 years	23,20
20 bis 39 Jahre	27,54
40 bis 59 years	26,94
60 bis 79 years	18,47
80 years and above	4,04

Salzkammergut ist a tourism region, less than 3 % work still in agriculture and mining, around 1/3 in industry and trade, 2/3 in service, including tourism.

2. We think that an approach unlike the preservation for the natural inheritance and cultural heritage is necessary for the preservation of “continuing landscape (the category of World Heritage)”. Please tell us the fact.

- (1) About the relationship between local industry and the local cultural landscape

Not many industrial companies reside in Salzkammergut (Salinen Austria, Hofmann Elektrokohle, SGL Carbon), all medium size, around 200 to 300 work force, sites are outside the core and buffer zone of world heritage, a few are in a designated business park remote from town, with no affection to tourism and tourist.

- (2) About the history of local industry and the local development

Local industry was dominated until the early 1900s by the saline and saltmines. Around 1920 early electricity companies used the difference in elevation of Gosau and Goisern (around 300 m) to dig a tunnel through the mountain and create a waterfall power plant. Around that some other energy consuming branches arose (Aluminium [closed down], SGL Carbon, Hoffmann etc.)

- (3) About the relationship between local industry and inhabitants

Industry is still another major part of economy in Salzkammergut, having in mind, that around 1000 people are employed by 3 or 4 companies.

- (4) About the activities and measures taken to keep the landscape in good condition, with a persistent development of the local landscape and life of inhabitants.

We have strict regulation concerning waste and dumping. Separation of garbage is compulsory (Paper, plastic, metal, organic, rest), we have a sewage facility for the region, which boasts itself to be independent of outside energy. Gas and district heating systems were introduced just recently. Building, traffic etc. is limited by regulation. In certain areas only certain buildings (height, size) are allowed to build. Federal subsidies support environment and culture.

3. In the case of medium sized or small sized cities having historic cultural assets, We think that the preservation would not be successful without local vitality. Please tell us How the local circumstances was before being registered to World Heritage and what the opportunity of the registration for World Heritage was.

Registration for world heritage didn't affect local circumstances of culture, so with the label many are more pride of their culture. Local vitality ist vivid, many different organization and clubs are very active, so many of them are not aware of this, they work for our world heritage, to hand over tradtion and develop it farther.

4. Please tell us how the site of World Heritage affected to the regions after the registration.

- (1) About the influence to the local industry.

(Condition of the local industry related to the site of World Heritage, Balance with the sightseeing business, Merit and demerit by the tourist increase, Restrictions of industrial activities required after being registered in World Heritage etc.)

No influence to the local industry, as standards were not affected and were kept on a high level like before. Maybe more awareness.

- (2) About the influence to the local inhabitants

(Awareness changes of the local inhabitants, Lifestyle changes of the people engaged with the local industry related to the World Heritage, etc.)

World heritage ist a project of generations, Salzkammergut is now 10 years on the list, lifestyle has not changed due to that. The younger generation is more aware and proud of that.

- (3) About the influence to the local administration.

(Changes of the local economy, Established measures Good influence, Bad influence, etc.)

Local administration acts together with the world heritage standards and „advertises“ as part of the local self image.

5. Please give us an advice for medium sized or small sized cities in Japan where people attempt to put an individual regional plan into practice with utilizing historical and cultural assets.

World heritage gives a good example of continuing an evolving culture and heritage. It defines key facts internationally accepted and known as a base for future development. Without world heritage it is crucial to find out major cultural values, where most of the population adheres to and identifies with. A regional plan can only work with a population calling themselves “we” (without any hostile competion to other “we” – regions), who share a common history and culture. This is in any case to a certain measure a construct.

“We” in Salzkammergut can overview centuries of history an special devolpment, where salt was badly dispersed and needed and therefore people producing it, were well estimated. This salt history still affects people here today.

Dr. Michael Kurz
Geschäftsführer BASIS

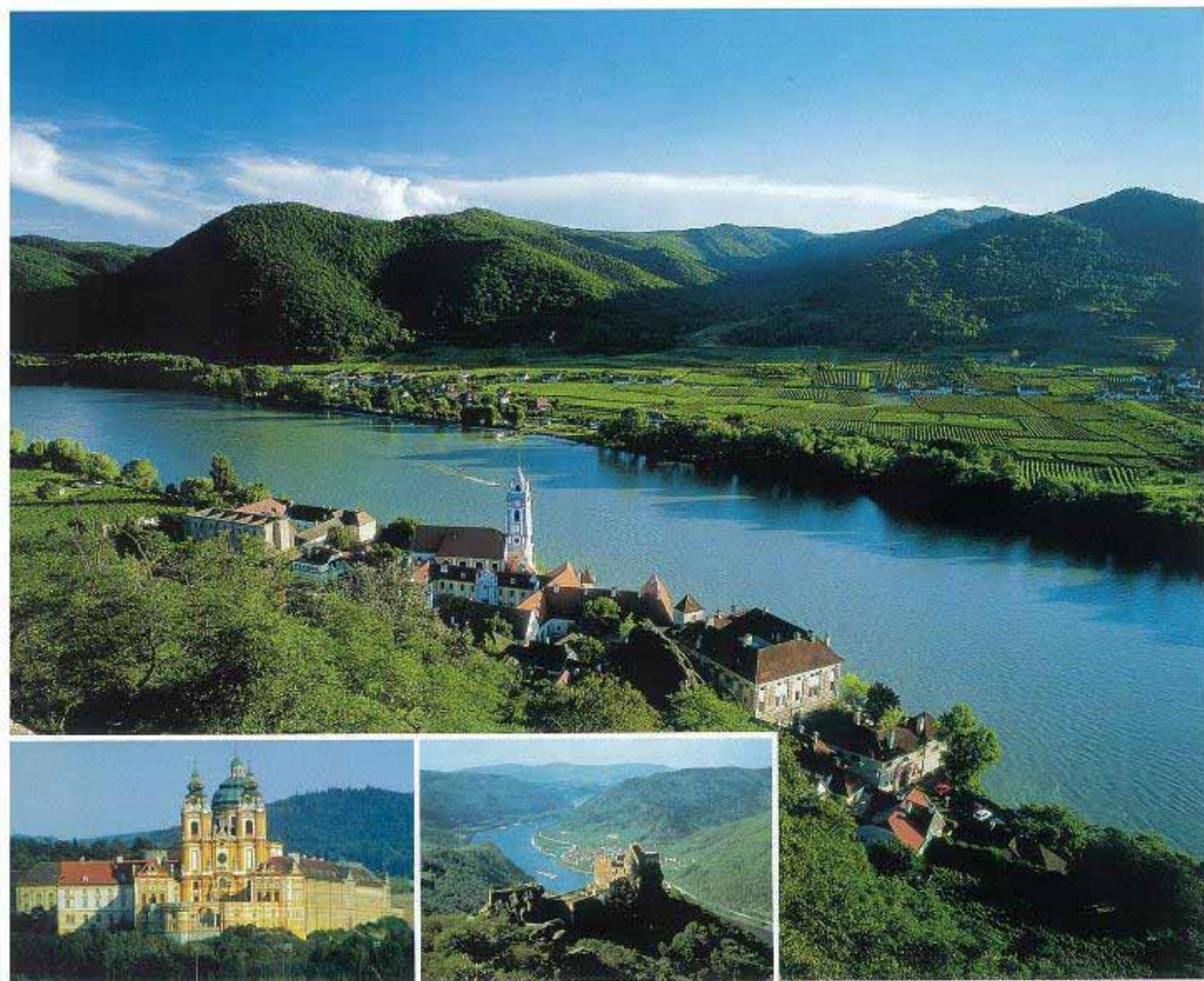
世界遺産 ヴァッハウ渓谷の文化的景観

1. はじめに

世界遺産は、自然遺産・文化遺産・複合遺産の3種類に分類されており、2007年7月時点で851件が登録されている。

文化遺産の分類の中には文化的景観が含まれており、「人間と自然環境との相互作用の様々な表現」を意味し、「自然的環境との共生のもとに継続する内外の社会的、経済的及び文化的な力の影響を受けつつ時代を超えて発展した人間社会と定住の例証」と位置づけられている。

文化的景観の解釈は難解だが、日本の文化財の範疇では、庭園・橋梁・渓谷・海浜・山岳等の特別名勝や名勝に指定されているものが、この概念に近いと考えられる。その範疇は極めて多様性に富んでおり、新たな分野の文化財指定の取り組みも注目されているようである。



写真－1 デルシュタイン(上)、メルク修道院(下左)、アックシュタインの古城跡(下右)

2. ヴァッハウ渓谷の概要

世界遺産に登録されているヴァッハウ渓谷は、オーストリア北部のドナウ川下流地域に広がる景勝地である。

ヴァッハウ渓谷の文化的景観は、メルクとクレムスとの間約36KM、ドナウ川が流れるドナウ渓谷の一角であるヴァッハウ地方に広がり、その自然との調和は絵のように美しい。

ヴァッハウを貫流するドナウ川の自然環境、そして、メルクやクレムスなど中世の面影が残る美しい街並みの集落、メルクの壮大な修道院やデルシュタインの水色の塔を持つ教会などの建築物、それに葡萄の栽培が行われている農業景観など、ヴァッハウは良質のワインであるヴァッハウ・ワインの産地としてもその名を世界に知られている。



写真-2 シェーンビューヘル城



写真-3 葡萄畑

3. ドナウ・クルーズでのヴァッハウ渓谷

ドナウ川は、ドイツ南西部シュバルツバルトに源を発し、ほぼ東に流れてオーストリア・ハンガリー・ウクライナ等の国々を通りルーマニアで黒海にそそいでいるヨーロッパ第二の川で、全長は2,850Kmあり重要な航路として、また観光資源として古くから利用されてきた。

ドナウ川流域で最も美しいといわれているヴァッハウ渓谷の視察は、ウィーンから西に約110kmの「メルク」から出発するドナウ・クルーズを利用して行った。小雨の中で想像をめぐらすこともでき満喫できた。

メルクには東西320mもあるバロックの最高傑作の建物であるメルク修道院（ハプスブルク家の霊場）が高さ60mの断崖に建っており、修道院の前は異民族の侵入を防ぐ要塞であったようだ。



写真-4 メルクの街並



写真-5 ドナウ川クルーズ船

ヴァッハウ渓谷の両岸には古城や教会のある小さな町々が点在し、美しいぶどう畑・果樹園が続いていた。中でも川岸ぎりぎりに建つシェーンビューヘル城は9世紀の建造でタマネギ型の尖塔を持つ

城は最も優美に感じられた。

オーストリアの風景写真に最も多く登場するアクシュタイン城は、ドナウの川面から300mの断崖の上の、長さ150mの大きな岩に12世紀に建てられた。

デュルンシュタインは、背後の森と赤い屋根の家々・水色の尖塔のあるバロック教会・修道院・山の上の荒城と、絵になる風景であった。イギリスのリチャード獅子王が1194年に幽閉されていた城は、30年戦争時にスウェーデン軍に町とともに破壊されて荒城になっていた。



写真－6 船上での研修



写真－7 デュルンシュタイン

4. ヴァッハウ渓谷の文化的景観の保全と観光資源としての活用実態

ヴァッハウ渓谷は、蛇行するドナウ川、流域の水郷風景、切り立つ岩壁など豊かな自然と、葡萄畑など整備された農地、修道院や古城・廃城などが点在する典型的な風景が相俟って、見事な風景のシンフォニーを奏でていた。極めて特徴的なのは、数々の歴史的建築が生み出すアクセントと視覚的リズムであった。

ヴァッハウ渓谷には、その恵まれた気候風土のため、先史時代から集落があったようだ。ここで発見された「ヴィレンドルフのヴィーナス」は2万6000年前のものとのことである。さらに古代ローマ時代以降、各エポックの建築が数多く残されており、歴史の重みを感じた。

それら多くの古城、古い建築物は、外観はそのままに内装は時代に合わせて大きく改装され、ホテル・レストラン・物産店・住居として活用されていた。メルクでの昼食は重厚にして明るく温かい雰囲気の中、地元産のワインとともに快適にいただくことができた。

雄大な流れの中での船上では、世界的な観光地らしく6ヶ国語（独・英・伊・西・仏・日）のガイドアナウンスが流れており、日本語のアナウンスがあることには驚いた。しかしながら、古城のアナウンスがドイツ語で始まっても、日本語は最後で、古城は遥か後方ということがあった。

船上からの自然と集落の調和した文化的景観はすばらしかったが、下船後デルシュタインの農地を散策してみて、手入れの行き届いた葡萄畑や農場に伝統ある地域の産業へのこだわりを感じた。農作業に従事している人の姿が見えなかったことは残念だったが、観光をも意識した経済活動、とりわけ、農業を中心とする一次産業を頑固なまでに守り育て、文化的景観と一体となった生活の様は、私たちに大きなヒントを与えてくれた。



写真－8 デルシュタインの街並み



写真－９ デルシュタインの葡萄畑



写真－１０ ホイリゲでの夕食

また、ヴァッハウ渓谷からは少し離れていたが、ウィーンの森の近くでワインを作っている地元農家を中心に運営する新酒ワインを飲ませる「ホイリゲ」を体験した。「ホイリゲ」はワインのつまみになる料理を中心にした居酒屋に近い飲食店で、アコーディオンやバイオリンの生演奏と合わせて、ウィーンの名物になっており、農業と観光を両立している好例だった。時期的に今は最高の新ワイン「ホイリガーワイン」の味は忘れることができない思い出となった。

5. おわりに

ヴァッハウ渓谷の文化的景観を訪れたことで、広大なユーラシア大陸の中での幾度かの戦争の傷跡を垣間見るとともに、まさに自然環境との共生のもとに歴史的建造物を守り続け、現代に生かしているヨーロッパの人々のたゆまない努力と意思の強さに学ぶべきことは多いと感じた。

ヨーロッパの人々の機能性や合理性を追求する傍ら、伝統や歴史を大切にする大陸的な国民性と、島国でありある種刹那的ながら繊細な日本人の国民性との違いはあるが、歴史的風土の保全と活用におけるポイントが「水」と「歴史」「宗教」であることに変わりはないと思う。

日本のほぼ中心の「大津」は、比良・比叡の山並みに抱かれた日本最大の湖「琵琶湖」を有しており、日本仏教の母山、山岳修行の場であった世界遺産「比叡山延暦寺」、三井の晩鐘で知られる「三井寺」や紫式部が源氏物語の構想を練ったという「石山寺」など多くの歴史文化遺産がある。

それら人類共通の宝物を世界の全ての人々と共有し、未来の世代に引き継いでいくとともに、それら歴史的風土を活用して、今後のまちづくり・グローバルな産業振興・心を癒す観光振興につなげていかなければならないと思っている。

参考文献・資料

- １）ユネスコＨＰ ユネスコ世界遺産の概要
- ２）世界遺産ガイドー文化的景観
- ３）文化資産としての景観形成の時代へ：ニッセイ基礎研レポート２００４． １１
- ４）オーストリアの世界遺産：オーストリア政府観光局

世界遺産 ブダペストのドナウ河岸とブダ城、アンドラーシ通り（その１）

1. はじめに

ブダペストはドナウ川の両岸にまたがった都市で、右岸（西側）のブダとオーブダ、左岸（東側）のペストの３地区からなるハンガリー共和国の首都で、産業、商業、交通の中心である。

ブダ地区は歴史的建造物が群在し、ペスト地区は近代的な都市となっている。ブダとペストはライオン像が両端を見守るセーチェーニ鎖橋を渡って行き来ができる。国会議事堂、中心街、英雄広場はブダペストの最も美しい景色。街中の多くの建物が世界遺産に登録されているため、美しい中世の世界を楽しむことができる。

人口は１９８０年代半ばの２０７万人が最高で、それから若干減少し現在は１８０万人である。ブダとオーブダ、ペストの３地区はもともと別々の町であり、１８７３年に合併されてブダペスト市が形成された。ブダ城やマーチャーシャ聖堂を中心に、１４世紀から１５世紀にかけてのゴシック様式やルネサンス様式、１９世紀のネオ・ゴシック様式等の建築群が登録物件とされている他、２００２年に歴史地区の拡張によってアンドラーシ通りが追加された。通りは、パリのシャンゼリゼ通りを模したプラタナスの並木であり、セーチェーニ鎖橋のたもとからペスト地区の市民公園までの通りである。

2. 世界遺産登録基準について

１９８７年「ブダペスト、ドナウ河岸とブダ城」の名の下に、世界遺産登録がなされた。

「ブダペスト、ドナウ河岸とブダ城、アンドラーシ通り」として歴史地区が拡張されたのは、２００２年のことである。世界遺産登録基準における以下の基準を満たしたと見なされ登録がなされた。

- ① ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの
- ② 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例

3. 主な登録物件

1) ブダ城

１２４２年ハンガリー中興の祖であるベーラ４世が、ドナウ河畔の丘に居城を兼ねた砦を建設したのが歴史の始まりである。１４世紀にはゴシック建築の王宮に生まれ変わり、１５世紀後半にはルネサンス建築の様式に改築された。マリア・テレジアによる再建によって、部屋数２０３室の巨大さを誇るに至った。



写真-1・2 ブダ城

2) マーチャーシュ聖堂

1255年ブダ城内に建築され、歴代国王の結婚式や戴冠式の間として利用された。1479年にマーチャーシュ1世による大改築によって、高さ80メートルの尖塔が増築された。



写真-3・4 マーチャーシュ聖堂

3) 国会議事堂

ハンガリー建国1000周年を記念して建てられた国会議事堂。1885年に着工され、9年の歳月をかけて1904年に完成したネオ・ゴシック様式の巨大な建造物。階段や回廊は延べ20kmにも及び、部屋数は691を数える。ハンガリーの長い歴史が育んだ文化と技術が凝縮され、それが世界遺産として評価された理由の一つになった。



写真-5・6 国会議事堂

4) セーチャーニ鎖橋

ドナウ川の兩岸に広がるブダ地区とペスト地区をつなぐ。



写真-7・8 セーチャーニ鎖橋



5) アンドラーシ通り

2002年に歴史地区の拡張によって追加された通り。この通りは、建国一千年を記念し市民公園と共に整備された。通りの名前の由来は、建設を推進したアンドラーシ首相である。パリのシャンゼリゼ通りを模したプラタナスの並木道であり、セーチャーニ鎖橋のたもとからペスト地区の市民公園までの2.5kmの通りである。地下に欧州初の地下鉄、地上にはオペラ座、西洋美術館、現代美術館、ブダペスト動植物園、サーカス、遊園地、聖イシュトヴァーン大聖堂、英雄広場、セーチャーニ温泉、リスト音楽院等がある。



写真-9 アンドラーシ通り



写真-10 聖イシュトヴァーン大聖堂



写真-11 ブタペスト オペラ座



写真-12 英雄広場

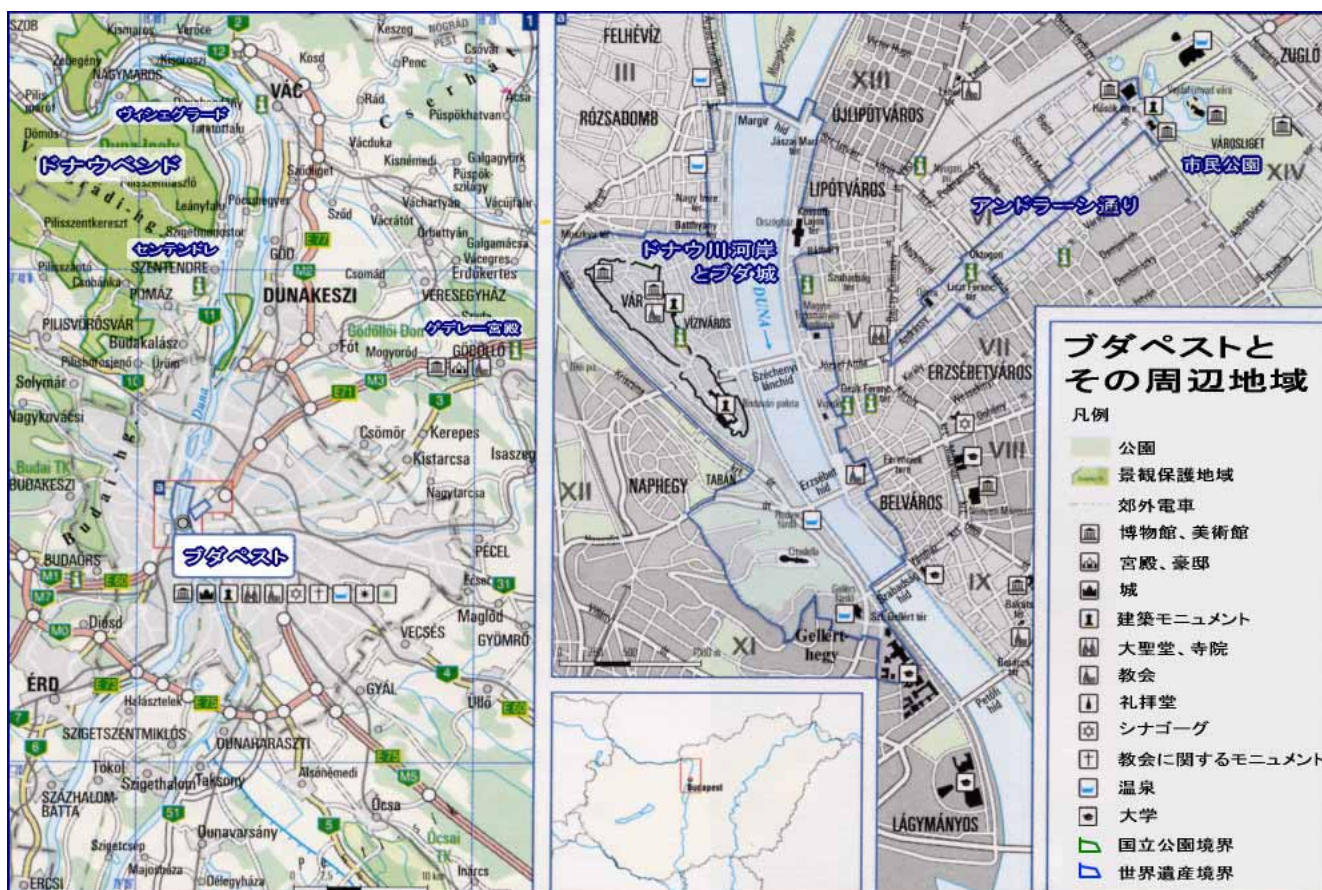


図-1 ブダペストとその周辺地

4. 歴史的街並みの保全と観光資源としての活用

ブダペストには、237ヶ所の歴史的建造物、223ヶ所の博物館や美術館ギャラリー、35ヶ所の劇場、90ヶ所の映画館、2ヶ所のオペラ座、12ヶ所のコンサートホール、約200ヶ所の娯楽施設が、多彩なプログラムを用意している。各旅行社の企画するバスや船、あるいは徒歩による市内観光ツアーは、1年365日を通じて訪れる観光客のためにそれぞれの好みに応じたプログラムを提供している。

また、ブダの丘陵の下には、たっぷりとした湯量の温泉を湛えた洞窟が縦横に走っている。市内に全部で80ヶ所ある源泉からは、毎日7千万リットルの湯が湧き出ており、12ヶ所の温泉や療養所に湯を供給している。

参考文献・資料

- 1) ハンガリー政府観光局 HP <http://www.hungarytabi.jp/index2.htm>

世界遺産 ブタペストのドナウ河岸とブダ城、アンドラーシ通り（その２）

ー 世界遺産を支えるブタペストの音楽関連施設と活動 ー

１．序曲

我々がブダペスト訪問した１０月２３日は、１９５６年のハンガリー動乱、ソビエト連邦に対する民衆蜂起の日であった。数千人の市民が殺害されたその追悼のミサが、ブタペストの世界遺産登録の聖イシュトヴァーン大聖堂で行われていた。

天空へ突き抜けるようなすばらしい響きの混声コーラスだったブダペストの世界遺産は「ブダペスト、ドナウ河岸とブダ城、アントラーシ通り」の歴史地区である。その登録基準については他の報告に詳しいのでそれらを参照いただくとして、ここではこれから世界遺産の中にある音楽、またその関連施設と活動に着目してみた。芸術文化の深みが文化資産としての世界遺産を強力に支えていると理解し思いつくまま記してみたものである。



写真-１ 聖イシュトヴァーン大聖堂
（ネオ・ルネッサンス様式）

２．世界遺産地区及び周辺の音楽施設と活動

世界遺産地区には数多くの音楽関連施設があり、それらは主にアントラーシ通り及びその周辺に集中している。これらの存在、活用は世界遺産の文化的景観を強く支えていると推察できる。下記に主な施設や音楽家、活動状況を紹介する。



写真-２ 国立オペラ座

１）国立オペラ劇場

１８８４年ネオ・ルネッサンス様式で建設され、当時のヨーロッパオペラ劇場の中で最も壮麗なものといわれている。１０００人以上の国家公務員の専属オーケストラ、歌手、舞台係で様々な演目が上演されている。観光客用に施設の内部ツアー（日本でも新国立劇場がバックステージツアーを行っている）が行われ、英語、イタリア語、ドイツ語、ハンガリー語のガイド（とにかく美人・・らしい）が説明してくれる。付近には「オペレッタ劇場」やレストランやカフェ等がある。オペラ劇場の前にある。（「カラス」という名はマリア・カラスからか？と推測される）

なお、ブタペストには３０以上のコンサートホールや劇場があり日夜活動しているとのことである。



写真-３ 英語担当のガイドさん

２）リスト記念博物館（アントラーシ通りのルネッサンス様式の建物）、リスト音楽院

ハンガリー語を話せないくらい国外で活躍した天才コスモポリタンピアニストのリスト（１８１１～１８８６）。後にハンガリーに帰りリスト音楽院を設立するなど音楽教育に貢献した。バルトークやコダーイもここから巣立ち、近年ではゲオルグ・ショルティがピアノ、作曲、指揮などを学んでいる。

３）バルトーク記念館（世界遺産地区からは外れている）

バルトーク（１８８１～１９４５）がナチスを嫌い（ユダヤ人ではない、マジャール人とクロアチ

ア人の混血) アメリカへ亡命する1940年以前に使っていたハンガリー最後の住居で、1924年築のモダンな建物が記念館となっている。バルトークは貝殻や石、植物、昆虫にも趣味があり、民謡収録記録など音楽の足跡と共にそれらの標本も展示されている(天才は趣味も広い)。

4) コダーイ記念博物館(アントラーシ通り)

コダーイ(1882~1967)が亡くなるまで住んでいた建物。その書斎には、音楽関係をはじめ、歴史、民俗学、文学、民話など5000冊を超えるあらゆる分野の書物が並んでいる(天才は学問・知識の幅も広い)。

5) 真のハンガリー音楽を求めたバルトークとコダーイ

バルトークとコダーイは同世代として「真のハンガリー音楽」を模索し、連携してハンガリー民謡を収集し調査を行っている。なんと、大きくて重いエジソン型蓄音機(コダーイ記念館に展示)に、コダーイは村人たちの古い歌5000曲以上を、バルトークは周辺国を含め1万曲以上を録音した。なんとも大変な努力、これが「ハンガリー民族音楽大鑑」共著に結びついた。

バルトーク、コダーイの曲が日本人に共感されるのはアジア起源のマジャール民族由来の旋律が取り入れられているためともいわれる。

3. ハンガリー音楽・ジプシーバンドについて

よくハンガリーのイメージにピッタリなのはジプシー音楽といわれるが、本来はハンガリー民族のものではない。ジプシーが流れてきたのは15世紀頃、18世紀マリア・テレジア時代の同化政策から彼ら固有の音楽を奏するようになったといわれている。

メランコリックなジプシー音楽はハンガリー音楽として19世紀から欧州に広まった。ブラームスの有名な「ハンガリー舞曲」もジプシーのメロディの編曲がもとであり、ハンガリー民族音楽の誤解(以前にはリストもハンガリー音楽をジプシー音楽と誤った紹介をしている)を生んだといわれる。

ハンガリーの舞曲で有名なチャールダーシュは「酒場風(チャールダ=居酒屋)」という意味。19世紀ヨーロッパ中で大ブレイク、現在ハンガリー料理レストランでジプシーバンド(ツィンバロムというハンガリー特有の楽器を中心に、ヴァイオリン、ベース、チェロから成る4~5人の楽団)もレパートリーとしている。



写真-4 ジプシーバンド

4. 終曲

思いつくまま音楽と世界遺産の関係について簡単に書いた。この他、ブタペストにはベートヴェン、ブラームその他多くの有名音楽家の足跡が至るところに残っているようである。いずれにしろブタペストの世界遺産が文化資産という音楽で強かに支えられているのは、間違いないと思われる。・

世界遺産 トカイのワイン地帯の歴史的・文化的景観（その１）

１．はじめに

トカイはハンガリー北東部に位置する小さな農村である。ブダペストからバスで約３時間、ハンガリー大平原を通り抜けたトカイ山の山裾のティサ川とボドログ川の合流点に位置する集落である。今回訪れた日は、一連の調査行程の中で唯一と言ってよいほど傘を必要としない、久しぶりに陽射しを感じた最終日であった。もっとも、晴天とまではいかず高曇りではあったが。

村に着いたときは当初の予想に反して（個人的なものであるが）目立った建物も少なく、小さなワイン農家とごく普通の家屋があるだけで、ワイン製造工場のようなものは全く見当たらない。後で判ったことは、村全体がワイン工場みたいなものであるということだった。この穏やかな地域が世界遺産に指定されていること、世界有数の貴腐ワインの産地であることは、外観だけでは全く想像がつかないことであった。



写真-１ ティサ川(奥)とボドログ川(手前)の合流地点



写真-２ 村の入り口にあったトカイ地方の案内地図

２．世界遺産としてのトカイ地方

１）ユネスコ登録の概要

トカイワイン地帯の世界遺産登録名称は、Tokaj Wine Region Historic Cultural Landscape であり、「トカイワイン地帯の歴史的・文化的景観」と訳されている。当初指定（２００２年）の際には、「歴史的」の文言はなかったが、２００３年に名称の変更がなされている。遺産のタイプとしては文化遺産であり、指定要件としては

iii) 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠

v) 特に不可逆的な変化の中で存続が危ぶまれている、ある文化（または複数の文化）を代表する伝統的集落または土地利用の際立った例

に該当している。指定区域は７箇所に分かれ、その中心地がトカイー帯で、面積は１３,４２５ha、これに付随した地区は極めて面積は少なく、０.６haから４.０haの区域が周辺に点在している状況である。区域内には２８の集落(settlements)があり中心の集落がトカイである。

2) トカイの歴史の断片

トカイの歴史はワインの歴史といってもいいほど、ワインと切り離すことができない。というか、トカイについて今回いろいろと調べてみたのだが、ワインのこと以外の記述はほとんど見られない。さらに邦語のものは極めて少なく、資料を解きほぐすのに多くの時間を要してしまったとひとまずいい訳をしておく。

この地方でワインが作られていたとする記述は約1,100年前にまで遡られるらしい。しかし、トカイがワイン史上注目を浴びるようになったのは、16世紀になってからである。既に1571年5月15日付けの文書でトカイのアスーワインについての記述が見られる。広く言われているのは、1650年若しくは1647年のトルコとの戦いの時にブドウの収穫が遅れ、11月の畑には乾いたブドウが残されたままであった。しかしこのブドウとワインとから新たなワインを作り出したところ、これまでに経験をしたことのないワインができ上がり、これがアスーワインの始まりと伝えられていた。しかし、古文書からはそれ以前からアスーワインが作られていたことが明らかになっている。

その後のトカイの出来事はこのアスーワインをめぐるものである。ヨーロッパの貴族や王たちはこぞってこれを手に入れようとした。その中で生まれたのがルイ14世の「ワインの王にして王のワイン」という言葉である。またベートーベン、ロッシニ、リスト、シューベルト、ゲーテなどの芸術家の名前もトカイを語る上でしばしば現れてきている。

トカイの特徴の一つに、閉鎖的な集落という性格がある。

古くからトカイのワインづくりは自給自足的に行われてきたようである。そのため他の地域の影響を受けることなくワインがつくられ、ブドウの収穫は手摘みで、集落総出で行われ続けたようである。このためブドウ収穫祭が大規模に行われている。2007年も我々が訪れる前の10月5日から7日まで開催された。またトカイはワインづくりに関する諸条件に奇跡的にもほとんど全て適合する地域でもあった。ブドウ畑は山の斜面にあり、ティサ川とボドログ川の川霧に包まれるとともに、土壌条件もブドウ栽培に適した粘土質のものである。さらにワインの貯蔵に欠かせない樽の材料である樫は周囲の林から供給され、集落の地下には各家のワインセラーが縦横に作られている。特にトカイで合流する2つの川の川霧は、貴腐ブドウには欠かせない条件を生み出し、世界三大貴腐ワインの産地となっている。

かつてトカイの恵まれた条件の下に、30種を超えるブドウが栽培されたこともあるが、現在ここで栽培できるのは4種に限られている。トカイが歴史的にも文化的にも評価される原因は、こうしたトカイの閉鎖的なワインづくりにあるといえよう。昔から変わらないスタイルのワインの製造と人々の暮らし、他地域からの影響を受けることなく続けられた伝統的製法、大規模な工場の進出や他の産業による開発の波にも晒されることなく、むしろトカイのワインをめぐる王侯貴族の支配権争いなどによって築かれたものである。



写真-3 コッシュート(Kossuth)広場



写真-4 コッシュート広場のバックス

3) 現在のトカイ

2002年にトカイが世界遺産に登録された背景は少々複雑な経緯があるようである。現地で説明して下さったナジーさんによれば、2つの大きな問題に直面しているという。1つはハンガリーの地形的な特徴にその原因があるように思われる。体制が変わり、EUに加盟を認められたハンガリーは経済的な成長が急がれている。このためエネルギーの確保は急務と言っても決して大げさではない。しかし、ハンガリーはハンガリー大平原の言葉があるくらい国土の大半が平坦な農業国である。自然エネルギーとしての水力を求めるとすればその地域は限られてくる。トカイはその狙い目となっているのである。トカイ山などが隣接しティサ川などの河川が存在することは、ダム建設の適地として注目される理由となっている。2つ目は、交通量の増大による環境の悪化である。トカイ地帯には採石場があり、そこに出入りするダンプトラックの交通量は経済発展に伴って増加している。一方、トカイ周辺の地形から新たな幹線道路の建設は多くの費用を要するとともに、既存のブドウ畑を改変することにもなる。このため既存の道路に車両が集中し大気汚染の進行が急激であるという。これはブドウにも影響を与え、最近では貴腐ブドウだけでなくアイスワインの原料である氷結ブドウの収穫が難しくなっているという。

そのほか世界遺産に登録されたことによって、国や村では保全と整備に関する新たな施策に取り組もうとしている。まず、保全施策であるが、国土計画を立案するとともに、この地域における建物や土地利用について法律を定め強い規制をかけている。建物については地域を定め用途を限定し、ワイン産業の保全に積極的に取り組んでいる。また、土地利用ではブドウ以外の耕作について制限するとともに、必要なブドウ畑の確保に努めている。具体的にはブドウ畑のエリアで他の耕作が行われているところはブドウ畑への転換を進めている。もともと建築に対しては自由度が低いヨーロッパでは当たり前前の施策ともいえるが、日本に置き換えれば非常に厳しいものと批判される可能性が高い。しかし、強い規制をかけることによりトカイのワインを守ろうとする国の姿勢はトカイワインが流通を広げ世界各地を市場とする国家施策とも合致するものであろう。最近ではフランスやドイツ、イタリアワインに混じってトカイワインを日本の酒屋で見かけることが増えてきたことでもお判りであろう。

整備の面に関しては、村が積極的に取り組んでいる。ここでそのいくつかを紹介しておく。村の外周道路の建設、商店街の振興、ティサ橋の改修、インフラ整備、学校建設、城の修復、病院・警察署の建設等である。これらは住民の生活環境の向上を図るだけでなく、観光客に対するサービスの向上も目指したものである。特に世界遺産の登録後は観光に力が入れられており、客の滞在時間を増やすことや宿泊客の増加に関する施策に力が注がれている。また、それぞれのワインセラーにおいても宿泊や試飲が可能な施設が増えている。また、トカイのワイン企業は体制が大きく変わった1990年以降に生まれたものであるが、『トカイルネサンス』というグループを組織し、各ワインセラーの特色やワインをホームページで紹介するなど、トカイの名前とワインセラーとしての誇りを持ちながら伝統を守り、市場を広げる努力をしている。



写真-5 斜面に広がるブドウ畑



写真-6 トカイのメインストリート？

3. おわりに

今回の視察に参加し、これまで比較的馴染みの薄かった中央ヨーロッパを直接この目で見ることができたのは個人的に大きな収穫であった。さらに、今まであまり興味を持っていなかった各地の世界遺産について調べることが非常に苦しいことも実感できた。日本国内で出回っている世界遺産に関連する書籍の大半は観光客向けのものであること、食べ物や宿泊場所については丁寧に説明されているものの、現況や課題、歴史や文化的背景についてはほとんど入手することができなかった。このためネットを利用した資料収集となったわけであるが、かろうじてわかるのは英文のもので、現地語（特に今回はチェコやハンガリーの独自の言語）については全く判らない。判るのはそこに添付された写真ぐらいであったというお粗末振り。かろうじて判ると思われた英文についても内容を理解するのはおろか、とりあえず訳すのだけでも自動翻訳を使うという体たらくぶりであった。

しかし、こうした異文化に触れる機会を得られたことで視点が外に向き始めたとともに、多少はアルファベットに対する抵抗が少なくなったのではないかと自分では思っている。特に担当したトカイについてはワインの説明ばかりが目につきこの点では別の意味で勉強になった。

参考資料

- 1) Tokaj portal:<http://www.tokaj.hu/>
- 2) Tokaj,Zemplen:<http://www.tokaj-zemplen.com/English.html>
- 3) TOKAJ HETZOLO:<http://www.tokaj.com/>
- 4) Tokaj Renaissance:<http://tokaji.directinfo.hu/Hirek.html>
- 5) Tokaji-Wikipedia,the free ebyclopedia:<http://wn.wikipedia.org/wiki/Tokaji>
- 6) UNESCO World Heritage Centre -Official Site:<http://wha.unesco.oeg/en/35>
- 7) ハンガリー政府観光局:<http://hungaryyabi.jp/>

世界遺産 トカイのワイン地帯の歴史的・文化的景観（その２）

１．はじめに

ハンガリー共和国は、中央ヨーロッパの国である。オーストリア、スロバキア、ウクライナ、ルーマニア、セルビア、クロアチア、スロベニアに囲まれた内陸国で、平地の多い国土となっている。またドナウ川などのヨーロッパの有名な川が通っている。

日本のように各地に温泉が湧き出ており、公衆浴場が古くから建設・利用されてきたため、ヨーロッパ有数の「温泉大国」としても知られている。その中でトカイは北東部のボルショド・アバウーイ・ゼンプレーン県のティサ川流域、ボドログ川沿いに位置している。



図-1 トカイの位置

２．トカイが世界遺産に指定された背景について

トカイは世界遺産登録基準において以下の基準を満たしたと見なされ、登録がなされた。

- ① 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠
- ② 特に不可逆的な変化の中で存続が危ぶまれている、ある文化（または複数の文化）を代表する伝統的集落または土地利用の際立った例

２００２年、ユネスコの世界遺産委員会は、トカイの歴史的ワイン地域を世界遺産に加えることを決定した。これは過去一千年を経て育まれてきたワイン醸造の歴史を守ること、そして古くからのワイン地方の統一性を維持することを目的としたものである。言い換えれば、トカイにおいて発展してきた単一生態系、人類文化と伝統の独特な相互依存は世界的に非常に貴重なものであり、これを保護することは世界中の人々にとって有益なものと判断したためであった。

3. トカイとトカイワインの歴史について

トカイでは、中新世期のブドウの葉、今日のブドウの原型の化石が発見されており、このことからブドウ種はトカイ原産のものであるといわれている。これは、例外的な微気候、火山活動、火山活動により形成された特殊な土壌、緩やかな傾斜地、そして10月にボドログ、ティサ川から立ちのぼる霧など、自然の好条件が揃っていたためと考えられている。

フランスのルイ14世が「これぞワインの王、王のワイン」と絶賛したトカイのワインは、二つの起源を持つ。一つは東のコーカサス起源で、もう一つは西のローマ起源である。この両方の起源が、トカイにおけるブドウ栽培方法、そしてワインセラーの建築に影響を与えていると考えられている。一般にブドウ栽培とワイン醸造は、既にマジヤール人征服の時代に始められたといわれているが、この説を証明する具体的な証拠はみつかっていない。ブドウ栽培の痕跡は、この地にワロン人が移住してきた後、12世紀後半のものが現在発見されているものの中で最も古いものである。時代の移り変わりとともに、サクソン人、シュワブ人、ポーランド人、ルーマニア人、アルメニア人、ユダヤ人等、この地の定住民族も移り変わっていったが、どの民族もその経済、社会生活、そしてワイン文化を向上させたという点で共通している。

1737年に国王の勅書により世界で初めてワイン地方として隔離された時から、国の保護を享受してきた。ワインづくりの各過程は、ブドウ園、農家、村、そして古いそして地下深いところにあるワインセラーでみることができる。



写真-1,2 訪問したワインセラー内の様子

4. おわりに

千年以上に亘ってワインづくりを続けてきたトカイの地を訪問した。その生活、文化、経済に根付き育まれてきた景観は、のどかですばらしいものだった。

日本と重ねあわせた時、似たような風景は水田や畑の広がる農村にあると思う。日本の稲作地域も世界遺産には登録されていないが、千年以上は続いている。日本において、農村の文化・風景を守り、育み、または回復させていくことも私たち造園家の使命であると感じた。

世界遺産 トカイのワイン地帯の歴史的・文化的景観（その３）

（１）「文化的景観」と世界遺産登録地区トカイの概要

１９９２年に導入された世界遺産の一概念に「文化的景観」がある。これは長期にわたる人類文化の進化・発展を示すものであり、具体的には農村・牧草地や、庭園・公園、劇的な自然景観に配された文化遺産などであり、現在５０カ所が登録されている。日本では「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）」が１カ所登録されている。

トカイ村は千年以上前から今日までワインを生産し続けた特徴的な土地利用、葡萄畑、農村の歴史、さらに３００年前からワインの生産管理を厳しく行い、良質のワインを生産する自然と文化が評価され、「文化的景観」として２００２年、世界遺産に登録された。

そのトカイワインは、フランス王ルイ１４世に「ワインの王、王のワイン」と言わせた世界の３大貴腐ワインの一つである。貴腐ワインは木製の樽で２年以上の熟成を経た上で出荷される。

（２）景観の保全と地域の関係性および課題

最終日は午前８時にホテルを出発、ブタペストより東へ２８０kmのトカイ村へ向かう。高密度のブタペストから約１時間も走ると大平原が地平線まで続き、曇り空は青空へと好天した。１０時３０分にはトカイ地方へ入り、小高い丘が見えてくる。このゼンブリンの山からは香りの高いブドウ樽を作る樹を伐り出し、周辺の工場で樽に加工される。このあたりにもブドウ畑はみえるが、トカイのワインと呼べるものにはならない。



石灰岩の丘に延々と広がるぶどう畑
地下はワインの貯蔵庫が迷路のようにある。



ゼンブリンの山（丘）

１０時５０分、トカイ村へ到着した。トカイツアーリストのユーリア・ナジ嬢の説明によると、トカイ村はボードローク川、ディッサ川の合流点である立地から湿度と乾燥のバランスで特有のブドウが育つ。

９月の後半の雨によって着生するフンギ（黴）が香りと糖度を閉じ込め、トカイ・アスーといわれるエッセンスの素をつくりあげていく。石灰岩の丘は全山がブドウ畑であり、地下の迷路のようなセラーは、生産と貯蔵と熟成環境（温度１２度、湿度９５％）に適している。ブドウはかつて２６種類あったが、現在はそのうちの３種が生産され、７割はフルミント種である。製造技術は１７世紀から大きな変更はないとのことであった。村の人口は１２，９４７人、周辺域には７２，３８０人が居住し、このうちの９割がなんらかのかたちでワインの生産に関与しているそうである。

トカイワインは薬効があり、そのために商品価値が付加された。現在でも、地場産品として外向けに販売するだけでなく、地元の人々は折々に愛飲しているそうである。



河川の合流点



ユーリア・ナジ嬢の解説を聞く（鈴木裕氏撮影）

現在、トラックの排気ガスや建物に対して住民の勝手な手入れなどは問題であり、ランドスケープ保護や観光制限のための法律がないので、検討の必要があるとのことであった。

15世紀の始めに作られたワインセラー「ラーコツィ・ピンツェ」（17世紀に貴族であるラーコツィ家の所有となった）で6段階の試飲を行う。黄金色のワインは飲むほどに甘く、全員がバッカスとなって酔いしれ、昼食前の至福の一時を過ごした。

注）ピンツェ（醸造販売所）



ラーコツィ・ピンツェと広場のバッカス像



ワイン保存状態を示すレプリカの展示

（3）中小都市で歴史的・文化的資産を活かした個性あるまちづくりのポイント

東京へ帰ると、赤福の消費期限、製造日、原材料表示偽装や比内鶏がブロイラーだったとか、毎日ニュースを賑わせている。食品のトレーサビリティがいわれ、国産ものでブランドであれば大丈夫と思って購入した人達は、大きく期待を裏切られたであろう。

そこで、歴史的、文化的資産の価値とはなにかである。

トカイ村では、自然の恩恵に感謝し、技術に拘り、関連者はそれを生きる糧として疑うことなく今日まで継承してきている。当たり前のことを当たり前に継続する。そこに大きな経済効果の振幅はないだろうが、継承してきた方法でなければその品質（世界の評価に値する価値）に至らないのである。

いくらシェアが広がったからといって、混ぜ物をして生産量を上げるようなことはしない。この生産に対する哲学が、すなわち歴史的、文化的資産の価値として評価を得る基盤となっているのではないだろうか。

彼らにとって世界遺産への登録は、時間経過の中の1プロセスに過ぎないのではないかと感じた。言うなれば「グリコのおまけ」である。土地に住まう人が、お宝を認識しアンデンティティを持って生き、多少の個人的な不利益があったとしても、誇り高く伝えていけるか否か、ここにまちを維持するポイントがあるのではないだろうか。

Ⅲ. 資料リスト

1. 募集パンフレット

2. 公式訪問先との連絡調整記録

- ① 公式訪問の申し入れ
- ② 事前質問書
- ③ お礼状

3. 事前調査研究資料

- ① 世界遺産について

世界遺産とは（ユネスコHP <http://www.unesco.jp/contents/about.html>）

世界遺産の種類（世界遺産ガイー文化的景観—Ⅵ. 文化的景観）

文化的景観について（世界遺産ガイー文化的景観—Ⅵ. 文化的景観）

文化資産としての景観形成の時代へー景観法が問う国民の感性と行動—

（ニッセイ基礎研レポート 2004. 11）

- ② 世界遺産視察先概要について

世界遺産 プラハ歴史地区

世界遺産 チェスキー・クロムロフ歴史地区

世界遺産 ザルツカンマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの文化的景観

世界遺産 ヴァッハウ渓谷の文化的景観

世界遺産 ブダペストのドナウ河岸とブダ城、アンドラーシ通り

世界遺産 トカイのワイン地帯の歴史的・文化的景観

4. 視察先収集資料

【チェスキー・クロムロフ】

1970 修復前の町の様子

1900 年前後の町の様子と解説

【ハルシュタット】

質疑応答概要

質問状回答文（世界遺産スタディー・センター所長 Dr. MICHAEL KURZ（MR）より）

【トカイ】

レクチャーパワーポイント資料（タイトル：Tokaj Historical Wine Region）

パワーポイント追加資料

条例、マネジメントプラン等（英文）

5. オプショナルツアー

10/24 ウイーン風居酒屋「ホイリゲ」での夕食

10/24 ウイーン学友協会 コンサート

10/25 ロマンチック・ドナウ川 ディナークルーズ

6. 写真集

むすび

「景観」というものは、人間の情感と非常に深い関わりがある。それは、私たち人間に安らぎをもたらす一方、不安を与えたり、時には私たちを脅迫したりする。景観は人々の心情に影響を与え、人間の創造性を育む印象の源である。同時に、私たちの文化の表現であり、価値観の表現でもある。それは、過去100年間に我々が為したことの鏡に映った姿なのである。だから、人間が景観と如何につきあうかは、極めて重要なテーマである。

また、「景観」は、単に人間の感覚を基準にして造くられてよいものではない。地域のエコロジー（生態系）保存の考え方の結果であり、地域の気候に基づくものであり、自然の持つエネルギーを育むことを表現するものである。水辺と植生と大地を含む景観の評価は、そこに生息する生物の健康や、人間の精神活動に与える影響といった基準によっても下されなければならないものである。

今回の海外調査で、印象に残ったやり取りがある。「なぜ景観をそこまでして守るのか」という参加者の問に対して、その女性は「伝統や文化的景観を守れないのは野蛮人だ」、「それは、インテリジェンスの問題だ」と答えたそうである。「その野蛮人とは？」、「そのインテリジェンスとは？」という更問に対して、その女性は・・・

社会を動かしていく、歴史をつくっていく、そしてそれを直してゆく、その方向ややり方は、その社会の歴史、国民性、現在の状況等に合った中で、ある程度泥縄式でもよいからその国民、その社会に一番合った方法をとにかく自己流で編み出していくしかないのではと思う。そういう意味で、他を参考にすることは非常によいことではあるが、それをそのまま持ってくることは、木に竹を接ぐようなものである。欧米の例や他都市の例を参考にするのはいいが、日本の各地域はそれなりの解決策を自らの心で考えなければならない。

国土交通省と文化庁は、「歴史的風致の維持再生に関する法律（仮称）」を今通常国会に提出するそうであるが、各地域は自らの100年後の姿をしっかりと描ける「インテリジェンス」を持って、取組んで欲しいものである。今回訪れた多くの地域では、美しい文化的景観の中で日々の暮らしが営まれている。決して夜間、無人となる博物館をつくっているのではないのである。生きているまちを維持しているのである。